

---

令和5年度 都市・農山漁村の地域連携によるセミナー運営業務、体験交流計画策  
定支援事業、子供農山漁村交流推進支援事業、及び調査分析等の請負

# 報告書

---

令和 6 年 3 月  
総務省自治行政局地域力創造グループ  
人材力活性化・連携交流室



# 目次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 第1章 事業概要 .....                       | 3  |
| (1) 事業の背景と目的 .....                   | 3  |
| (2) 各業務の目的と実施フロー .....               | 5  |
| 第2章 セミナー運営業務 .....                   | 6  |
| (1) 概要・開催内容 .....                    | 6  |
| (2) セミナー内容・広報ちらし .....               | 7  |
| (3) 参加者アンケート結果 .....                 | 18 |
| 第3章 子どもの農山漁村体験交流計画策定支援業務 .....       | 22 |
| (1) 概要 .....                         | 22 |
| (2) 北海道幌加内町における計画策定支援 .....          | 23 |
| (3) 三重県大紀町における計画策定支援 .....           | 32 |
| 第4章 交流推進支援事業支援業務 .....               | 41 |
| (1) 概要 .....                         | 41 |
| (2) 奈良県下市町における取組 .....               | 42 |
| (3) 神奈川県・群馬県中之条町における取組 .....         | 51 |
| (4) 報告会の実施概要 .....                   | 60 |
| 第5章 子どもの農山漁村交流プロジェクトの課題と今後の方向性 ..... | 69 |
| (1) 各業務を通して明らかになった課題と解決の方向性 .....    | 69 |
| (2) 連携省庁ヒアリングの結果 .....               | 70 |
| (3) 課題解決の方向性 .....                   | 72 |

## 第1章 事業概要

### (1) 事業の背景と目的

子どもの農山漁村体験交流（以下、本取組という。）は、子どもの自立心等を育んだり、学校での学びと連動して学びを深めたりする効果が期待できるだけでなく、受入側地域にとっても長期的な関りを築ける関係人口の増加や、農林漁業者の所得向上等の効果が期待できる。

本取組を取り巻く環境や、本取組の目指す姿を、子どもを送り出す都市部の地域（送り側）と、子どもを受け入れる農山漁村地域（受入側）、双方の連携の観点から表 1 の通り整理した。

表 1 子どもの農山漁村体験交流を取り巻く状況・想定される課題

|                    | 送り側                                                                                                                                                                                 | 相互の連携                                                                                                                                                                              | 受入側                                                                                                                                                                            |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 近年の動向              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>場所にとらわれない働き方や価値観</u>が浸透し、農山漁村地域への関心が高まっている</li> <li>・ 学びのニーズが深化し、<u>探究学習やSDGs教育</u>などを提供する必要がある</li> </ul>                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交流人口から関係人口へ関心が移っており、<u>より地域の課題解決につながることを求められている</u></li> <li>・ オンラインでの交流手段が充実・浸透し、交流の頻度を高められる一方、<u>リアルな交流のもつ価値</u>が再認識されている</li> </ul>    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人口減少と高齢化から<u>受入関係者の引退が相次ぎ、受入体制の維持が困難</u>になっている</li> <li>・ コロナ禍が長期化する中で、不安やキャンセル対応に苦慮した経験などから、<u>交流自体への忌避感</u>が一部の地域で生まれている</li> </ul> |
| 地域が目指す姿<br>本取組を通して | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農山漁村体験に参加する子どもたちに<u>都市での生活では得られない学び</u>を提供し、「生きる力」を育む</li> <li>・ 農山漁村地域への理解を深め、交流に積極的に取り組む</li> </ul>                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「行っただけ」で終わりにしない<u>中長期的な交流</u>が生まれ、<u>若い関係人口</u>が形成される</li> <li>・ 事前のすり合わせにより、子どもが求める学びを的確に提供でき、<u>受入側の負担を最小化</u>する</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>地域の資源が体験・学びのプログラムとして活用</u>され、地域の誇りにつながっている</li> <li>・ 持続可能な受入体制が構築され、<u>地域のなりわいを支える要素</u>として本取組が位置付けられている</li> </ul>               |
| 想定される課題            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 探究学習やSDGsとの組み合わせや、事前事後学習による<u>中期的なプログラム編成まで手が回っておらず</u>、本取組で得られる学びが深まらない</li> <li>・ 単なる「田舎体験」にとどまり、リアルな交流ならではの学びが実現したかどうかかわりにくい</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「なぜその地域を訪問するか」が不明確なため、特に<u>低単価の教育旅行において価格競争が深刻化。受入側の疲弊につながる</u></li> <li>・ アレルギー対応など、<u>子どもの受入に係る調整事項</u>が増え、交流にあたっての手間が増大している</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受入体制が脆弱で、少ない事務局メンバー・高齢化する担い手により、<u>一部の人・組織に負担が集中して疲弊</u>している</li> <li>・ 本取組の地域にとってのメリットが見出せず、<u>地域内での連携</u>がとりづらい悪循環が生じている</li> </ul> |

|              |                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                              |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 現状の支援施策      | <ul style="list-style-type: none"> <li>●交流推進支援事業の際に、送り側も支援する</li> <li>・教育プログラムへの支援（文科省）</li> <li>・長期の宿泊体験学習に対する支援（文科省）</li> </ul>              | <ul style="list-style-type: none"> <li>●受入側で体験交流計画を策定する際に、送り側との連携体制についても検討する</li> <li>●交流推進支援事業を行う際に、送り側と受入側の連携という観点から支援を行う</li> <li>●HPでの受入地域リスト公開（マッチング促進）</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>●自治体での体験交流計画策定により、受入体制を検討</li> <li>・農泊地域の立ち上げ・高度化支援（農水省）</li> <li>・自然公園を活用した宿泊体験への支援（環境省）</li> </ul>                                  |
| 今後求められる支援（例） | <ul style="list-style-type: none"> <li>・カリキュラムと農山漁村体験とを結びつけるために、<a href="#">複数年で、体験交流の前後のプログラム</a>を支援</li> <li>・中長期的な本取組の成果を評価する仕組み</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・送り側のニーズと受入側の状況をすり合わせるために、<a href="#">旅行会社など専門的な第三者が関与</a>する</li> <li>・支援を受けていない既存の取組に対しても、送り側・受入側の連携によって改善できる点がないか点検する</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・何が学べるかを明確化した<a href="#">高付加価値なプログラム</a>を開発・販売できる体制を地域に構築する</li> <li>・<a href="#">観光協会やDMOなど、民間の受入窓口機能の拡充を支援し、自走化を支援</a>する</li> </ul> |

本事業の仕様書に記載された目的は、以下の通り。

「デジタル田園都市国家構想総合戦略」の関連施策に位置づけられる「子供の都市・農山漁村交流」の取組（以下、本取組という。）は、農山漁村での宿泊体験や自然体験を通じて、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い子供の成長を支えるとともに、受入地域の活性化や交流による地域間の相互理解の深化にも寄与している。

このような効果を更に高めていくためには、単年度の一過性の取組ではなく、送り側と受入側双方が緊密に連携しつつ、継続的な取組としていくことが、事業実施により得られる知見・ノウハウの継承・蓄積や、PDCAサイクルを反復することによる取組の質の改善などの観点からも重要となる。

本事業では、セミナーの開催や、支援団体において農山漁村体験交流事業が長期間継続できる体制を構築するため、子供の農山漁村体験交流計画の策定の支援を行う。また、令和6年度以降の取組の継続を計画しつつ、送り側または受入側として、相互に緊密に連携し、創意工夫を凝らして、本取組を実施する地方公共団体に交流支援事業を委託し、調査した成果について全国の地方公共団体への普及を図ることによって、本取組をより進めることを目的としている。（本事業の仕様書より抜粋）

本事業では、セミナーによる本取組の波及と、計画策定・交流推進支援事業による地域の支援の両方を行う。後者で得られた示唆を分析し、本取組に関心のある地域に広く知ってもらうことで、本取組に参画する地域が増えるとともに、本取組の成果を送り側・受入側双方にとって最大化しつつ、相互の連携により負担を減らしていくことにつなげる。

## (2) 各業務の目的と実施フロー

本事業は、以下の4つの業務からなる。各業務の目的を以下の通り整理するとともに、各業務を効果的に行い、得られた成果を取りまとめるため、業務フローを検討した(図1)。

### 1. セミナー運営業務

子ども農山漁村交流プロジェクトの送り側・受入側それぞれにとっての意義やノウハウを紹介し、今年度及び次年度に体験交流計画策定・交流推進支援事業に取り組む団体を増加させる。

### 2. 体験交流計画策定支援業務

支援団体において、地域の資源活用や地域内外の連携強化などにより、子供の農山漁村体験を持続的に受け入れられるための体制を構築する。

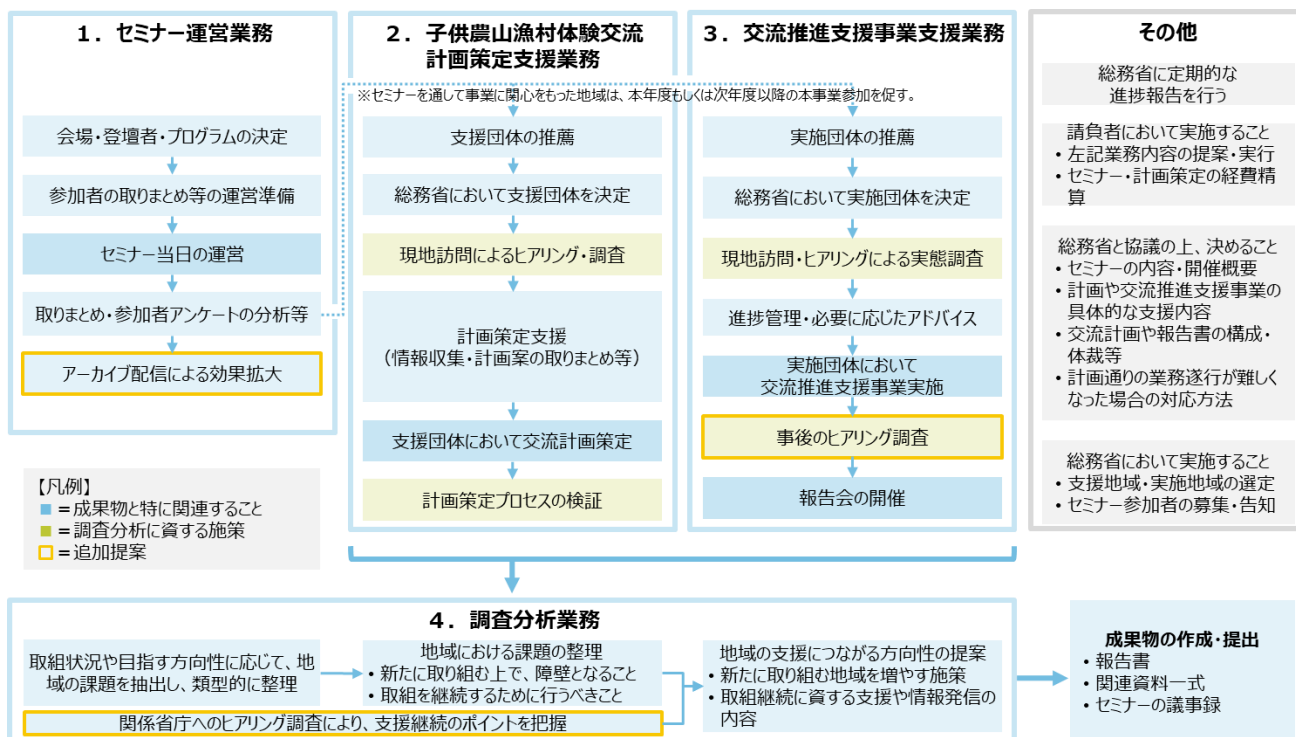
### 3. 交流推進支援事業支援業務

送り側・受入側の実施団体が連携して行う取組を支援し、今後も継続して交流に取り組むための課題と解決策を整理する。

### 4. 調査分析業務

計画策定支援事業・交流推進支援事業の成果をもとに子供の農山漁村体験に取り組む地域の課題を整理し、解決に向けた方策と、今後の支援のあり方を提案する。

図1 本事業の実施フロー



## 第2章 セミナー運営業務

### (1) 概要・開催内容

本取組の普及・啓発およびより良い運営方法等のノウハウを紹介することを目的として、送り側向け・受入側向けの2回に分けてセミナーを開催した。

<送り側にとってのセミナーの位置づけ>

- 想定する参加者層：やりたいことはあるが、専門的な知識やノウハウが不足しており、実現の道のりがわからない方／農泊事業がひと段落したが、次の打ち手が見いだせずにいる方
- 参加するメリット：専門家と交流し、新たな視点でアイデアや取組のヒントを得る／まずは個人的なつながりを作ること、今後相談できる環境につなげる（※具体的な案件に発展することも期待）

<受入側にとってのセミナーの位置づけ>

- 想定する参加者層：教育旅行の受入には取り組んでいるが、探究学習など新たな取組には詳しくない方
- 参加するメリット：本取組に係る環境の変化を理解し、自地域にとってのチャンスを、具体的な事例から得られたポイントに沿って形にしていく方向性がわかる
- 企画の留意点：専門家の話を聞いても「自分たちの地域ではできない」「優良事例と自分の地域は違う」とあきらめてしまわないよう、学校側のニーズを聞きながら実際の事例を聞く構成とした。

各回の開催概要は表2のとおり。

表2 本年度実施したセミナーの概要

|                     | 送り側向け              | 受入側向け                    |
|---------------------|--------------------|--------------------------|
| 副題                  | 自然体験を活かした探究学習      | オーダーメイドの教育旅行による選ばれる地域づくり |
| 日時                  | 2023年11月10日14時～16時 | 2023年11月17日14時～16時       |
| 参加者                 | 会場：22名／オンライン：36名   | 会場：22名／オンライン：74名         |
| アーカイブ<br>視聴者数       | 101回               | 83回                      |
| ※2024年2月末日時点ののべ視聴回数 |                    |                          |

## (2) セミナー内容・広報ちらし

### ① 送り側向け

図 2 の通り案内ちらしを作成し、総務省・連携省庁を通して全国の自治体・学校等関係者へ案内を行った。

図 2 送り側向けセミナーのちらし

送り側向け

➡

受入側

# 子どもの農山漁村体験交流セミナー

—自然体験を活かした探究学習—

日時

## '23. 11. 10 (金) 14:00～16:00

参加方法

会場

AP虎ノ門 11階 ルームD (定員30名)

東京都港区西新橋1-6-15  
 NS虎ノ門ビル(日本酒造虎ノ門ビル)

東京メトロ銀座線「虎ノ門駅」9番・1番出口より徒歩約3分  
 都営三田線「内幸町駅」A4a出口から徒歩約3分

オンライン

Zoomによるオンライン同時配信を行います。(定員なし)

参加対象

- 子どもの農山漁村体験に、【送り側】(都市部・学校関係等)で関わっている方
- 子どもの農山漁村体験にご関心のある方

お申込み

Webフォームからお申し込みください

<https://questant.jp/q/kopro2301>

参加無料

申込メ切日

11/8(水)

プログラム

- 開会あいさつ
- 子どもの農山漁村体験の意義・概要

特別講演「学校での学びを深める体験活動とは」

**第1部** 学校での学びと関連付けて、体験活動による学びの効果を高めるためのポイントを紹介しします。

---

**事例紹介** 子どもの農山漁村体験を実践する、地域や学校の事例を紹介しします。

**第2部** パネルディスカッション 有識者・実践者の3名で、送り側が今後取り組む方向性を議論しします。

- 関連施策の紹介
- 質疑応答

登壇者

特別講演・パネルディスカッション

子どもの体験活動の研究と実践

國學院大学人間開発学部 子ども支援学科  
准教授

青木 康太朗氏

国立青少年教育振興機構で自然体験活動の指導や調査研究、指導者養成などに従事し、北翔大学准教授を経て、2019年から現職。  
 文部科学省生涯学習調査官、子ども家庭審議会基本政策部会委員、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター客員研究員などを兼務。  
 青少年教育、野外教育を専門とし、体験活動の教育効果や安全管理の研究、自然体験活動の指導者の養成、体験活動に関する普及啓発に取り組んでいる。

事例紹介・パネルディスカッション

地域間の連携をコーディネートする

江戸川区教育委員会 教育指導課  
指導主事

松井 芳信氏

地域でしかできない学びを引き出す

私立武蔵高等学校中学校  
副校長

加藤 十握氏

お問合せ

株式会社JTB総合研究所

主催：総務省・内閣官房・文部科学省・農林水産省・環境省

7

## <プログラム>

- **開会あいさつ**
- **特別講演「学校での学びを深める体験活動とは」**  
國學院大學人間開発学部 子ども支援学科 准教授 青木康太郎氏
- **事例紹介1「地域でしかできない学びを引き出す～地域探究旅行のバリエーション」**  
武蔵高等学校中学校 副校長 加藤十握氏
- **事例紹介2「岡山県浅口市と東京都江戸川区の農山漁村体験を活用した交流事例」**  
江戸川区教育委員会 教育指導課 指導主事 松井芳信氏
- **パネルディスカッション**
- **関連施策の紹介**

## <内容(要約)>

### 特別講演「学校での学びを深める体験活動とは」

- 「体験活動」というと「子どもにどのような体験をしてもらうか」が強く出てしまいがちだが、学校の行事として行われる以上、「学習としての学びをどう深めていくのか」という視点も大切になる。
- 文部科学省が実施した調査によると、小学生の頃に自然体験をよくしていた子どもほど、高校生になってから自尊感情や外向性が高くなる傾向がみられた。また、社会体験をよくしていた子どもほど、高校生になってから向学校的な意識(勉強・授業が楽しいと思う気持ち)や新規追求性(物事への興味関心)が高くなる傾向があることもわかっている。このような体験を多く行っていた子どもは、自尊感情や外向性の得点が高いという傾向も得られている。
- 子どもが学ぶ過程には、体験・概念化・実践の3プロセスがある。1つ目は体験で、身の回りで起きる物事や現象を感覚的に捉える。そして、感覚的に捉えた物事や現象に対し、「なぜ、どうして」と深く考えることで、理屈に置き換えたり、概念化を図ることで、知性が養われる「概念化」の段階がある。そして、自分なりに色々な答えを見つけ、養われた知性を実際の生活の中で活かしながら、自分なりに学んだ答えをどんどん身に着ける実践の段階を経て、学びとなる。このように、子どもたちは体験をもとに、様々な知性を養っていく。
- 平成14年に文部科学省が発行した体験活動に関する事例集では、「体験活動は、思考や理解の前提であり、基盤となる」と述べている。子供たちが「なぜ、どうして」と疑問や問題意識を持つことは、身の周りに起こる事象を科学的・合理的・法則的に捉えなおし、知識や理解、学ぶ力や学びの方法を生み出すことにつながる。
- 現行の学習指導要領では、引き続き「体験活動は重要である」と明言されており、特活(特別活動)以外にも、様々な教科で体験活動の充実が求められている。セミナーの趣旨に鑑み、特活の視点を中心にお話したい。特活では、単に活動を行うのではなく、学校での学びを社会に出た後、様々な集団や人間関係の中で活かせるような経験を重ねられる機会が求められている。つまり特活は、教科での学びを実際の場面で、総合的に活用して実践するものであることと、特活の学び自体が各教科等の学習を行う上での土台となること、つまり各教科等と往還的な関係にあることが必要になる。
- 文部科学省が平成14年に出した事例集の中で、体験活動は教科等の「知」の総合化と実践化であると述べられている。また、学校での学びと現実社会は単純には結びつかず、「現実の世の中は、教科等とは関わりなく複雑に入り組み、絶えず動いている」。特に今はVUCAの時代といわれるように予測がしづらい世の中

であり、学校で学んだことが 10 年後・20 年後に通用するかは、教育界においても大きな課題である。単に学習した知識を身に着けるのではなく、身に着けた知識を実際に自分の生活の場面と結びつけ、どのように使いこなしていくかが重要になる。

- 学校で学んだ知識が、資質・能力の活用・実践として、農山漁村体験の中で先生が一言声掛けすることで、学んだ知識とその場面が結びつく。このような声掛けがあるだけで、学校での学びと実社会での結びつきが生まれるのではないか。
- 日常生活では体験できない「稲刈り」や「漁業体験」といった農山漁村での経験から教科書での理解を深めるとともに、新たに学ぶこともある。新たな学びが、教科での学びと結びつくことによって、更なる知識や理解の深まりとなる。体験活動を通じて得た学び・気づきをその後の学習の土台にとらえ、関連する教科等の学習を行う際には、それらを想起させながら指導することによって、生きて働く知識・技術の習得につなげられる。
- 経験と学びをつなげるだけでも、学校での学びはかなり豊かなものになる。そして、学校での教科や学習に活かす。往還的な学習を活かすために先生方に持ってほしい視点は、次の通り。
  - ①教科等の学習を通じて身に着けた資質・能力をどの場面でもどのように活用できるか。
  - ②児童・生徒が教科等における見方・考え方を働かせたり、これまでの学びを想起したりするため、どのような助言や指導をする必要があるのか。
  - ③体験活動を通じて得た学びや気づきを、今後どの教科等の学習でいかすことができるのか。「今日こんなことを学んだので、今度こういう話をしたら面白いかな」などと考えることができれば、体験と学習につながっていくだろう。
- これらは学校の中で比較的負担が少なく取り組めるとは思うが、地域とも協力しながら取り組む必要がある。私が青少年教育施設で勤務していた時は、研修の趣旨・目的を学校から聞き取って受入の準備をしていたが、今思えば児童観（子どもの状態）や、これまでの学びの状況、何を学んでほしいのかなどの想いを聞き取り、学校と地域をきめ細かくつなぐことで、連携が図れるのではないか。
- あらかじめ「何を学ぶか」「どんな活動をするか」を伝えることで、受け身から主体的な学びに変わる。事前学習は意欲を高める役割もある。事後学習は、体験を通して何を学んだか整理し、発表等を通して他人の学びを自分の学びにつなげて認識の幅を広げる機会である。集団宿泊活動の実施計画を作る際は、各教科等の年間計画と連動をはかることが重要である。
- 体験活動は学びにつながる重要な機会なので、ただの体験にとどまらないことで効果が高められる。集団宿泊活動は、学校では気づきにくい子どもの一面を知る機会である。教師がふだんと異なる環境で過ごす子どもの姿を見て、新たな側面を伸ばしたいと気づくかもしれない。「何を体験させるか」（活動の内容）ではなく、「何を学んでほしいか」「何を感じ取ってほしいか」を考えてみてほしい。

#### **事例紹介！「地域でしかできない学びを引き出す～地域探究旅行のバリエーション」**

- 武蔵高等学校中学校は男子校で、1 学年 4 クラス・180 名弱。ほぼ 100%が大学進学を希望している。教育目標として、世界の人々をつないで活躍できる人物を育てることを掲げており、「探究」「体験」「交流」を重視したプログラムを提供している。

#### **◆事例Ⅰ：学年単位の地域探究旅行／中学 2 年みなかみ民泊実習**

- 年間のスケジュールは、ICT を活用した事前学習を行い、夏休みに 2 泊 3 日の実習にでかけ、生徒が個別に

事後学習を行って発表をする流れである。現地実習では、地域学習・地域交流・探究活動を重視している。1 日目は希望するコース別に 4 台のバスに分乗し、各コースで学習・体験を行う。2 日目・3 日目は民泊や小規模宿泊施設に宿泊し、宿泊先で家業の体験・交流を行っている。

- 行程管理・現地での体験をそれぞれ専門の方に依頼し、学校も交えた分業体制により充実したツアーができている。交流活動を通して様々な角度から学習を深められ、中高一貫教育の初期の段階にある中学 2 年生に旅の楽しさを体験的に学びきっかけ作りになることも重要な意義と考えている。
- 現地では、現地のプロフェッショナルの方にお世話になりながら、萱場再生の現場を見学したり、農家民宿で農作業を体験したりしている。

#### ◆事例2:小規模の地域探究旅行／高校生「国境の島『対馬』を体験する」

- 総合的な探究の時間の自由選択枠を活用して、生徒個人の関心に応じた深い探究のプログラムを選択制で行っている。そのうちの 1 つのプログラムで、長崎県対馬市で行っているもの。
- 年間スケジュールは、個別にテーマを設定して事前学習を行い、夏休みに 4 泊 5 日の現地実習を行い、事後学習を経て活動報告を行っている。現地実習では現地集合・現地解散にこだわっており、自分の力で現地にたどり着く体験を生徒にしてもらっている。1～3 日目は民泊での家業体験や、テーマ別聞き書き体験、4・5 日目は現地の旅行会社に依頼して自然との共生をテーマとする仕事体験等のツアーを実施した。
- 教師自ら民泊の受入家庭を開拓していった経緯があり、行程管理・現地手配は教師自ら行い、現地の旅行会社が提供する着地型ツアーにも参加した。教師が手作りで築き上げてきた現地のネットワークが基盤となっており、地域の理解は深いものになっている。聞き書きの成果が蓄積されており、地域の方々に共有することで地域の魅力を再確認するきっかけにもなっていると感じている。

#### ◆事例3:小規模の地域探究旅行／高校生 鳴子地域探究旅行

- このプログラムは自由参加のツアーとして、2023 年度初めて行ったもの。高校生を対象として他校の生徒も募集し、希望者 10 名が集まった。現地で学校間交流ができた意義は思っていた以上に大きかった。
- 宮城県大崎市鳴子温泉地域で、自然（森林）と共生する脱炭素社会や地域循環強制県の構築に取り組む企業や、山形県最上町で行政主導で進めている地域循環型エネルギー事業の見学を行った。それぞれ主体や内容が異なる事業を見学し、地域におけるエネルギー問題を考えるきっかけとなった。
- 私が企画者として主担当を務め、鳴子・最上町それぞれの方の連携によって実現できた。
- こうしたプログラムが地域主導でできるようになれば、地域からプログラムを提案するきっかけになるのではないかと手ごたえを感じた。学校で企画するだけでなく、地域が直接参加者を募って体験ツアーを行うこともできるのではないかな。

#### ◆交流体験旅行企画の着眼点

- 学校（送り側）が明確な目的やテーマを持つこと
- 目的や旅行形態に応じて柔軟に地域と連携できるチーム体制を作る
- 様々な教科の担任が関与することが活かされる枠組み（カリキュラム）を作る
- 旅の行程に「あるく・みる・聴く・考える」（※宮本常一の言葉）「交流する」要素を取り入れ、生徒が「お客さん」ではなく主体的に参加する仕掛けをつくる

- 高校生や中学生が「旅」を通じて、日本の農山漁村のポテンシャルを体験できる
- 将来的には、学校旅行に限らず、地域が直接高校生・中学生向けの体験を提供できるプラットフォームが構築できると、子どもたちの学びに応えられるのではないかと

### 事例紹介2「岡山県浅口市と東京都江戸川区の農山漁村体験を活用した交流事例」

- 全国の市長会で浅口市長と江戸川区長の面識があり、地域の課題を都市間の交流で解決できないかという話から、地域の事業者の思いを受けて、両区市の首長から取り組みのきっかけとなった。
- 浅口市では2泊3日滞在できる宿泊プログラムを構築したかった。また、特別区（東京23区）との交流に関心があった。江戸川区は自然体験を活かした探究学習の機会を増やすことが課題であった。
- 令和2年度の実施に向けて調整していたが、コロナ禍で一度白紙になってしまった。令和4年度にあらためて浅口市から打診を受け、交流推進支援事業に取り組んだ。準備期間が短いこともあり、学校間の交流ができること、人数はあまり多くないこと、夏休み期間に実施することの条件を設定した。結果として、1学年1クラスの学校の校長先生に打診し、希望制の林間学校として実施した。
- 準備期間が短く、参加者への周知が難しかった。学校に対しては教育委員会から教員に説明し、児童に対しては校長先生が自ら説明してくれた。保護者に対しては、保護者会で校長・教育委員会から説明を行うことで、自由参加制だったが結果的にはほとんどの児童が参加できた。
- 浅口市医師会に万一の際の受入を約束頂き、浅口市の方々には熱中症対策で常に冷やした飲み物を運んで同行いただくなど、浅口市の全面的な協力のおかげで、安心して実施できた。
- 1日目は京都大学の天文台の見学の後、キャンプ体験をおこなった。浅口市職員もキャンプ場の宿泊までしていただいた。2日目は、漁船体験・カヤック体験をした。はじめて海で遊んだという子どもや、学校のプールで顔を水につけることすらできなかった子どもがカヤックに乗れたといった場面もあった。3日目の手延べ麺の見学先では、終わった後に江戸川区からの注文が増えたという話も聞いた。
- 子どもに回答してもらったアンケートでは非常に満足度が高く、浅口市の子どもとの交流が楽しかった、自然豊かで東京ではできない体験ができたという意見が目立った。
- これまでに交流事業を行った地域とは、江戸川区民祭りに出展してもらうなど、都市間の交流が続けている。また、教育活動でもつながりが継続できている。以前に交流した山形県鶴岡市とは、お米に関する授業をJA鶴岡青年部に行っていたという。

### パネルディスカッション

福永：青木先生には受入側と研究者としての視点、加藤先生からは学校として、松井さんからは教育委員会として、それぞれのお立場からお話し頂いた。まず、江戸川区で初めて農山漁村体験に取り組む学校や教育委員会の農山漁村体験に対するスタンスをお聞きたい。

松井：学校に農山漁村体験を伝えたところ、年間の計画が作られた中での打診だったため、若干の抵抗感があった。なぜ取り組むのか、なぜ浅口市を訪問するのかなどを話し、納得いただいた後は非常に協力して頂いた。「先生方は子どもたちの教育のためにこの機会を活かしてください」と伝え、それ以外の手配や準備は教育委員会が行うと伝えたことで安心していただけた。

福永：加藤先生は、江戸川区の例と異なり長年続けられている。続けられているポイントをお聞きたい。

加藤：国内外の交流活動については、「やりたいときにできる環境」が重要である。総合的な学習／探究などの

カリキュラムに位置づけるとともに、教師が取り組みたいと感じた時に自由に提案できる環境を用意することが重要。学年団は教師が入れ替わって継続性を担保しづらい側面があるため、たとえばみなかみ町の体験では、学年に関わらずみなかみ町の体験の経験が豊富な先生がチームを作り、地域側の事業者とも連携したチーム体制で、誰かに負担が集中しないように交流を続けている。人のつながりを維持する上でも、体制づくりが重要ではないか。

福永：体験活動に初めて取り組もうえて大切なことを、青木先生にお聞きしたい。

青木：これから取り組みたい学校にとっては、「体験の中で何に気づいてほしいか」など、子どもたちの姿をイメージしながら考えると良い。集団宿泊活動の場合、学校側がすべての負担を負うことは厳しいため、青少年教育施設など地域の資源を活用して、できることの組み合わせで考えることが必要。

福永：松井さんに、初めて取り組む地域へのアドバイスをいただきたい。

松井：浅口市にとって受入が初めてだったが、チーム作りが重要だったと感じている。たとえば漁船体験をする際に、漁協の確認を取ったり、船上での熱中症対策を考えたりと、一つひとつの課題を細かく対応していった。浅口市と江戸川区で、確認事項があれば相互に確認しながら準備した。

福永：伝統がない中で初めて行われるプログラムに対し、保護者の方からは不安もあったのではないかな。

松井：保護者の方々も、体験の意義はよくご理解いただいております。安心・安全がよく考えられていることが伝われば、非常に協力的な雰囲気だった。現地の様子がわかるように写真を常に配信するなど、保護者の不安を和らげる工夫を行った。結果として、保護者の方から「やってよかった」との声を多数いただいた。

福永：事前・事後学習を実践する際に、受入側と連携するポイントを教えていただきたい。

加藤：みなかみ町のプログラムの例では、事前学習で2~3回地域の方をお呼びするが、「どのタイミングで、どんな方に来ていただくか」が重要。はじめは生徒も町のことをよく知らないなので、観光協会等の方に町の全体像を話して頂く。2回目以降はコース制になるため、各論に入っていく。

学校がやりたいことを受入側の方にご理解いただくためにも、事前に生徒と交流することが効果的である。

福永：松井さんは学校を支援する立場から、事前・事後学習も支援していたか。

松井：オンラインの事前交流の準備を手伝うなど、安心して交流ができる支援も、教育委員会で行った。

福永：子どもに学んでもらう部分は先生方が行い、それ以外は全面的に教育委員会等学校外がサポートする体制だった。青木先生に、あらためて事前・事後学習の意義を伺いたい。

青木：活動に対する動機付けをして、イメージをしてもらって学びの意識を高めることが重要。先生方もどんな活動をするのか理解しておく必要がある。先生が内容・目的を理解しておけば、子どもの指導がより効果的にできる。さらには、地域から先生に見てほしいポイントを提示できると理想。イメージを持っておくことで、充実した体験活動ができる。

事後学習においては、オンラインで受入側地域の方に見てもらってコメントをいただくなど、交流を深められるのではないかな。事前・事後学習を通して学びを深めていくことが重要である。



## ② 受入側向け

図 3 の通りちらしを作成し、総務省・連携省庁を通して、全国の体験受入関係者・自治体関係者等に案内した。

図 3 受入側向けセミナーちらし

送り側
受入側向け

# 子どもの農山漁村体験交流セミナー

ーオーダーメイドの教育旅行による選ばれる地域づくりー

日時

'23. 11.17 (金) 14:00～16:00

参加方法

会場

AP市ヶ谷 5階 ルームD (定員30名)

📍 東京都千代田区五番町1-10 📍 JR中央・総武線「市ヶ谷駅」より徒歩約1分  
市ヶ谷大郷ビル 地下鉄有楽町線・南北線・都営新宿線「市ヶ谷駅」2番・3番出口目の前

参加方法

オンライン

Zoomによるオンライン同時配信を行います。(定員なし)

参加対象

- 子どもの農山漁村体験に、【受入側】(農山漁村地域)で関わっている方
- 子どもの農山漁村体験にご関心のある方

お申込み

Webフォームからお申し込みください

<https://questant.jp/q/kopro2302>



参加無料

申込メ切日

**11/8(水)**

プログラム

- 開会あいさつ
- 子どもの農山漁村体験の意義・概要

**第1部** 特別講演「教育旅行の環境変化と今後の可能性について」  
新学習指導要領やコロナ禍を経て変化する教育旅行の動向から、今後の受入側に求められることを考えます。

---

**第2部** 事例紹介 子どもの農山漁村体験を実践する、地域や学校の事例を紹介します。  
パネルディスカッション 有識者・実践者の3名で、送り側が今後取り組む方向性を議論します。

- 関連施策の紹介
- 質疑応答

登壇者

特別講演・パネルディスカッション

子どもの体験活動の研究と実践

公益財団法人 日本修学旅行協会  
常務理事 事務局長

高野 満博氏

株式会社JTBにて、教育旅行課長・教育企画仕入課長・西日本教育旅行仕入センター所長等を経て、2019年より現職。  
関西万博入場券制度懇談会等の各専門委員や、トラベルジャーナル・観光経済新聞等への寄稿、全国の教育旅行受入地での講演実績多数あり。教育旅行受入れやプログラム造成の相談等に対応し、教育旅行の発展に尽力している。

事例紹介・パネルディスカッション

地域間の連携をコーディネートする

公益社団法人 宮城県観光連盟 事務局次長  
みやぎ教育旅行支援センター センター長

三浦 均氏

地域でしかできない学びを引き出す

一般社団法人 大和飛鳥ニューツーリズム  
業務執行理事

下田 正寿氏

お問合せ

株式会社JTB総合研究所

主催：総務省・内閣官房・文部科学省・農林水産省・環境省

#### <プログラム>

- **開会あいさつ**
- **特別講演「教育旅行の環境変化と今後の可能性について」**  
(公財)日本修学旅行協会 常務理事事務局長 高野満博氏
- **事例紹介1「地域間の連携をコーディネートする」**  
(公社)宮城県観光連盟 事務局次長  
みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター センター長 三浦均氏
- **事例紹介2「生きる力を育む 大和・飛鳥民家ステイ」**  
(一社)大和飛鳥ニューツーリズム 業務執行理事 下田 正寿氏
- **パネルディスカッション**
- **関連施策の紹介**

#### <内容(要約)>

##### **特別講演「教育旅行の環境変化と今後の可能性について」**

- コロナ禍では多くの教育旅行が中止や行先変更などの影響を受け、特に感染者数の多い都市部を避ける動きが見られた。現在ではコロナ禍から回復して教育旅行の実施率は戻っているが、航空券代の高騰等により海外での教育旅行が難しくなり、国内にとってはチャンスといえる。
- 宿泊業界では人手不足やインバウンド需要の伸び、バス業界ではバス運賃の引き上げと働き方改革、航空業界では燃料費の高騰と機材の中小型化など、教育旅行にかかる費用が全体的に高まっている。さらに、感染症や災害のリスクが高まる中で、保険の重要性も高まっている。教育旅行の費用は増えているが、地域で定める修学旅行の実施基準による金額の上限はあまり変わっておらず、内容の変更等が必要になる場合もある。
- 学校においては、学習指導要領が改訂され、主体的、対話的で深い学びが求められている。「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現するために、ICT 端末の導入も進んでいる。  
日本修学旅行協会が発行する教育旅行データブックによると、コロナ禍で修学旅行のあり方や実施方法に変化があった学校は3割にのぼり、一部では探究型プログラムの導入なども取り組まれている。  
※新型コロナウイルス感染症が5類に移行する前に行った調査のため、感染対策が最も多くなっている。
- コロナ禍で多くの人が旅行業界を離れ、旅行会社の人材不足も課題となっている。経験の浅い営業担当者にとっては特に、受入地域から丁寧な情報提供を頂けること、ワンストップ窓口が整備されていること等が重要になる。
- 今後の教育旅行の変化として、日程の短縮や行先の変更など、物価高騰に合わせた動きが考えられる。また、探究学習のニーズに応じて分散化・コース選択制などが取り入れられる可能性もある。
- 教育旅行における農山漁村体験は、年齢や居住地が異なる他者と協働しコミュニケーションをとる重要な機会であり、グローバル化に対応した人材の育成に貢献するともいえる。
- 地域にとって教育旅行を受け入れるメリットは以下の通り。
  - 短期的視点：予約が早いうちに入り、キャンセルが起りにくい。社会経済の変動の影響を受けにくく、安定した市場である。

- 副次的効果：プログラム造成や受入にあたって、地域の魅力を見直したり、地域内の事業者・住民が連携するきっかけになったりする。
- 中長期的視点：関係人口や将来の担い手につながる。

また、教育旅行の受入ノウハウは、日本の文化を学びたいと考えるインバウンドの受入にも役立つものがある。

地域の人材不足解消に、子どもの頃から接点を作っておくことが効果的ではないか。

関係人口の“種まき”として、教育旅行は重要である。

#### 事例紹介1「地域間の連携をコーディネートする」

- 当初は「みやぎ観光復興支援センター」として、東日本大震災後にボランティア受入のために発足した。教育旅行の問合せ増加に合わせて 2013 年に「みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター」も発足し、2015 年にこれらの団体が統合した。被災地での生活再建と、ボランティアの受入を両立するために、ワンストップ窓口の必要性が高まっていた。
- 「みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター」は、宮城県観光連盟が県の事業として地域と子どもたちとの接点を作る活動を行っている。市町村・体験プログラム提供事業者等からプログラムの情報収集を行うとともに、プログラム造成の支援や、素材の掘り起こしにも取り組んでいる。
- プログラム構築支援として、①教育旅行にマッチしそうな素材を掘り起こす、②教育旅行を実施するために必要な項目と情報をまとめる、③教育旅行的視点から、プログラムに+αするとより良さそうな内容を一緒に考えるの 3 つに取り組んでいる。
- 東日本大震災から 10 年以上が経ち、教訓・学びが多様化している。センターの原点である震災学習について、2023 年から県復興伝承課と連携し、最新情報の収集・発信に取り組んでいる。
- 教育旅行の受入は、学校・地域の双方に効果があると考えている。学校側にとっては、深い学びの実現、自分ゴト化の機会、地域や社会との関わり、思い出作り等につながる。受入地域にとっては、地域の魅力や課題を伝えられる、地域に関心を持ってもらう、客観的に地域を見てもらうことで地域の価値の再発見ができるといった効果がある。
- 様々なプログラムを組み合わせ、ストーリー性のあるコースづくりに取り組んでいる。地域内でも接点がいなかった事業者同士の見学を結び付けて学びのストーリーを作ったり、震災学習と SDGs 探究学習を組み合わせ、多面的な学びを提供している。学校側にとっては学びの幅が広がり、地域にとっては地域内外の連携が促進され新たな魅力が発信される。

#### 事例紹介2「生きる力を育む 大和・飛鳥民家ステイ」

- 大和飛鳥ニューツーリズムでは、国内外の教育旅行だけでなく、海外の小グループや FIT の受入も行っている。
- 民泊は大規模な設備投資が不要で、地域経済の活性化につながると考え、先行する地域の事例を参考に取組をはじめた。2010 年に取組をスタートし、翌年に震災の影響で行先変更を余儀なくされた学校の受入を打診され、はじめて受入を実現した。その後も受入を続ける中で、近隣の地域にもホストファミリーが広がっており、現在は 11 市町村 120 あまりの受入家庭が参画している。
- 旅行会社とのコーディネートと、各種行政団体等との連携をしながら、ホストファミリーの確保・育成に取り組んでいる。民泊は住宅宿泊事業法の届出を基本としている。

- 大和・飛鳥民家ステイでは、①相手を思い、自ら伝える力（コミュニケーション力）、②協働調理（豊かな和食文化の継承）、③歴史深い土地で、日本の良さを知る（日本のルーツ探求）の3つを大切にしている。共同調理で料理の仕方を紹介することでコミュニケーションのきっかけにもなる。
- 大和・飛鳥民家ステイでは、品質向上の取組を重視して、価値を高めている。年に4・5回以上のセミナーを行い、民泊の受入家庭には毎年必ず受講してもらっている。
- コロナ禍で多くのキャンセルがあったが、スタッフがホストファミリーをつなぎ止めるとともに、様々なプログラムを造成し、現在の提供に至っている。竹林の整備や間伐について学んでもらい、訪れた学生にも伝えてもらう取組や、広報（SNSの使い方）に関する研修なども行っている。
- 大和飛鳥ニューツーリズムでは、①持続可能な運営体制の構築、②人材育成事業の確立、③インバウンド対応プログラムの整理の3つに注力している。経営としては、組織の運営を安定化させ従業員に適切な待遇ができ、Uターン者の雇用の場になることを目指している。そのためには受入泊数を増やすことが必要で、単価の引き上げにも取り組んでおり、農家民宿の中では日本有数の価格帯ではないか。そのために品質の確保に取り組んでいる。

### パネルディスカッション

福永（モデレーター）：コロナ禍では多くの教育旅行の中止・行先変更等があったが、現在の市場はコロナ前から変化したか。また、宿泊と日帰りの割合なども伺いたい。

三浦：コロナ禍で西日本を中心に受入が増え、宿泊客数の減少はみられなかったが、コロナ禍での宿泊者数の減少はあまりなかったが、行先が戻る来年度から、一時的に行先を宮城県に変更した学校を引き留めることが課題となっている。

ニーズとしては、震災・防災・減災が最も多く、SDGs学習も問い合わせがある。自然体験は、アクティビティに関する問合せが増えており、SUPなどのプログラムを提案している。思い出作りに学びがプラスされたように感じている。

下田：コロナ禍が明けて予約が増えている。コロナ前から探究学習を提案していたが、旅行会社の反応はあまり良くなかった。コロナ禍で新しい提案をしたいという雰囲気を感じたが、最近は元に戻っているような印象を受ける。

旅行会社の若手の営業マンと会話をしていると、彼らはSDGs学習などの新しいプログラムに興味を持っているが、会社全体の方針ではなかなか勧められていない印象を受ける。

福永：農山漁村体験の行先として選んでもらえるために、地域は何をするべきか。

高野：皆さんによくお話ししているのは、なぜ問合せが来たか、継続して来ている学校はなぜ継続できているのか、理解するべきである。何に魅力を感じているか理解できていないと、来訪が続かない。

旅行会社から新規の問合せがあるのは、その担当者が何らかの理由で関心をもっているもので、関心が無い営業マンに紹介するよりも結果につながりやすい。地域の何に関心を持ってくれているのか理解し、地域から旅行会社への営業のコツがわかると良い。

教育旅行の行先を変えるのは先生にとっても負担になるので、「なぜ、いま、この地域を訪れるべきか」を提示し、手間やデメリットを上回るストーリーを提示することが大事である。

福永：明日香村で民泊を始めた時の話にも通じるものがある。

プログラムとしてまとめていくにはどうしたらよいか。

三浦：まずは事業者の方の話を聞くようにしている。教育旅行ガイドブックを制作する前は、多数のパンフレットを袋詰めして商談会に行っていたが、評判が悪かった。なんとか一つに集められないかと思い、パンフレットの制作に取り組んだ。情報収集を通じて「お互いにお願ひできる関係」を構築できた点が良かった。

県庁にはファーストアプローチできる組織がたくさんあると感じる。そうしたところから紹介してもらう方が早く連絡ができた。SDGsに取り組んでいる学校・企業・農林漁業者に対しては、根気強く交渉を重ねた。

福永：広域での受入体制についてもお話し頂きたい。農家民宿の受入地域にとっては、宿泊キャパシティが課題になるのではないかと。宮城県でも、大和飛鳥ニューツーリズムでも、広域で受入に取り組まれている。連携のポイントを伺いたい。

下田：行政的な連携は6市町村と行っているが、自分から提案したわけではなく、自然発生的に受入家庭が増えていったなかで、連携先自治体の担当者から問い合わせがあって連携に至っている。市町村ごとの観光戦略を尊重することと、宿泊者数や民泊施設の件数など、地域にとっての成果を伝えることで良好な関係を築いている。

福永：オンラインでもご質問を頂いている。農山漁村体験の受入に取り組みたいが、人口1,000人ほどの地域で、高齢化も進んでおり、取り組むのが難しいと感じているとのこと。どのように取り組めばよいか。

高野：宿泊施設（ホテル等）との連携に取り組む地域が増えている。ホテルと民泊で半々に分けて1泊ずつ交代させたり、宿泊施設を選べるようにしたり、あるいは日帰りで体験を受け入れ、宿泊は近隣のホテル等に泊まるという形態も可能。一部、超広域で農家民宿の分宿をする学校もあるが、農林漁業体験だけでは受入が難しいので、宿泊施設との連携をしてみたいか。

福永：もう1件質問を紹介したい。地域の宿泊定員が少なく、農家民宿を増やしていきたいが、何に取り組めばよいか。

三浦：県内でも宿泊定員100名未満の地域が増えている。南三陸町では、かつては110軒の受入家庭があったが、現在は十数軒になっている。私たちがコーディネーターを務めて、近隣の登米市と広域で連携している。

規制によって民泊の開業ができずにいたという経緯もある。農家民宿の主管部署に、ルールの見直しを折衝した。設備要件がやや緩和され、消防署が安全を確認することで、新たな民泊施設の開業が認められている。こうした細かい部分にもヒントがあるかもしれない。

福永：粘り強い交渉が成果につながったとのこと、ご参考にしていただきたい。

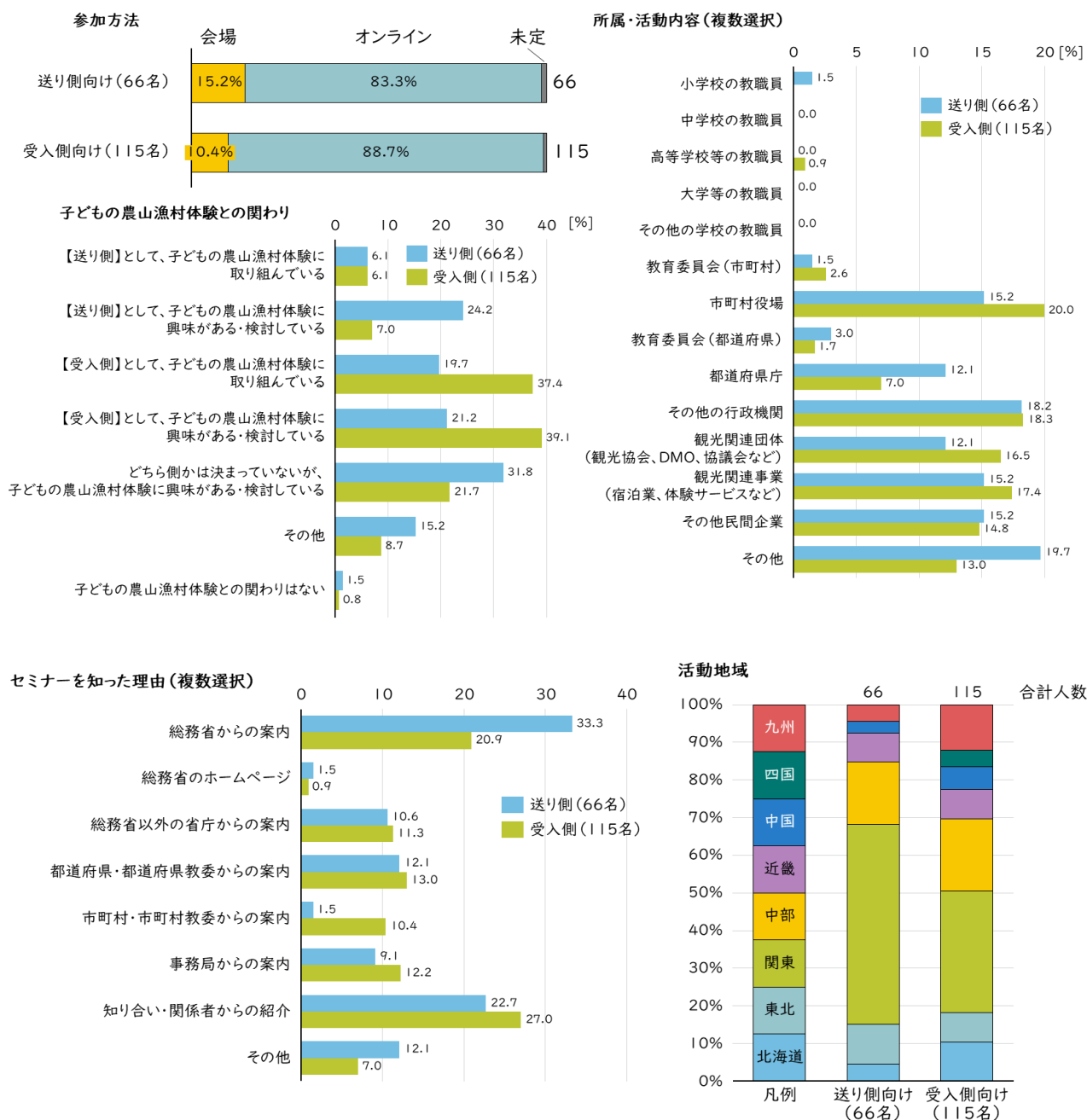


### (3) 参加者アンケート結果

#### ① 申込フォームより

申込フォームでは、セミナーの内容の参考とするため、子どもの農山漁村体験との関わり等を聞いた。送り側向けにも受入側関係者が一定数参加していることがうかがえるが、全体的に受入側の方が地方自治体や地方部を含む全国の関係者が参加している。このことから、受入側の方が本取組に関心が高い傾向や、受入側は送り側の考え方などを理解したいという課題もあると考えられる。

図 4 セミナー申込者の属性等(送り側・受入側共通)



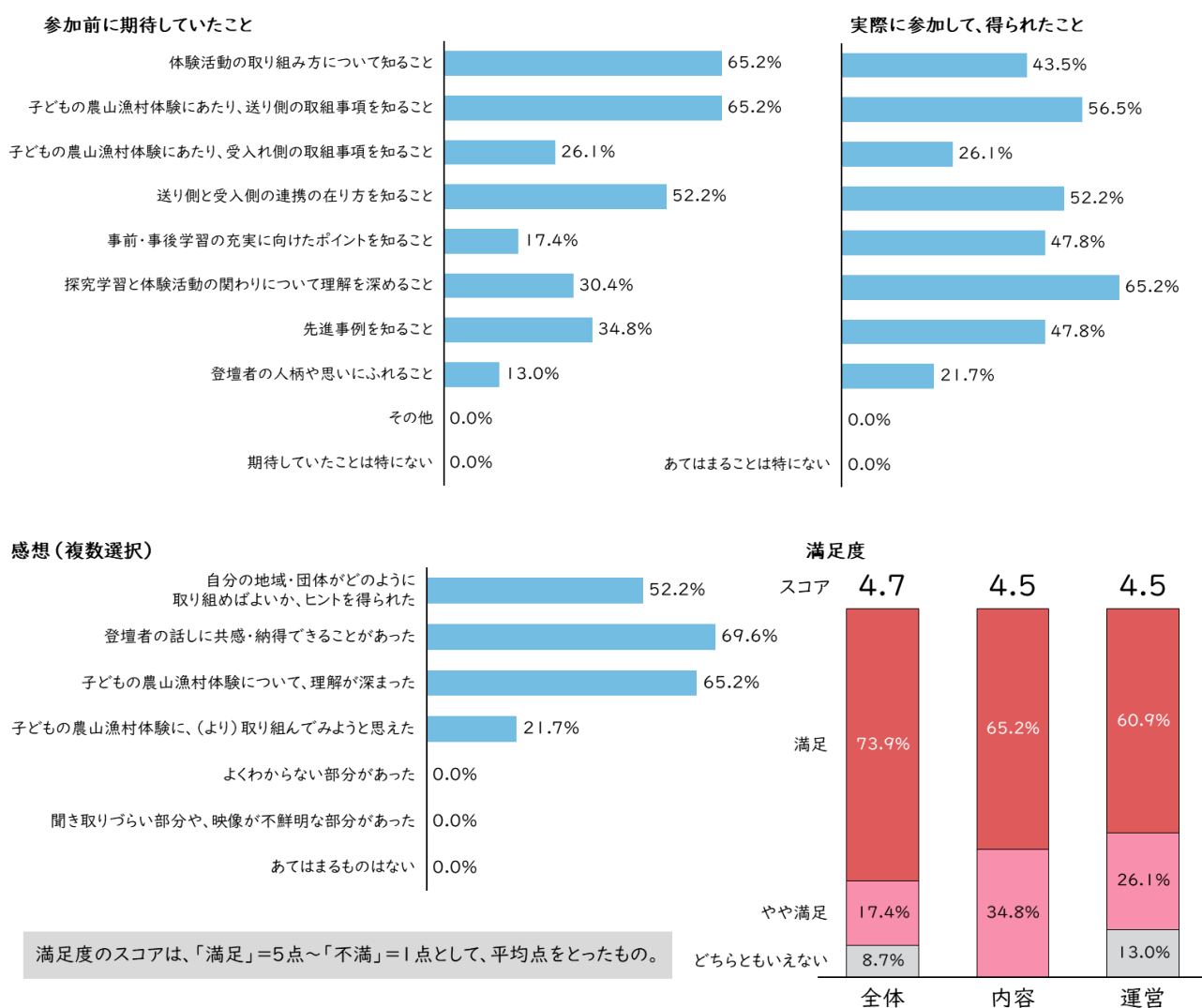
## ② 事後アンケートより

### <送り側向け>

「探究学習と体験活動の関わり」「事前・事後学習の充実」などで、「実際に参加して得られたこと」が事前の期待を上回っており、子どもの農山漁村交流の教育的な側面について、理解いただけたものと考えられる。

感想としては「登壇者の話に共感・納得できることがあった」「子どもの農山漁村体験について、理解が深まった」が 2/3 前後、「自分の地域・団体がどのように取り組めばよいか、ヒントを得られた」が過半数と高い水準だが、「子どもの農山漁村体験に、(より)取り組んでみようと思えた」の割合は 2 割程度となっており、子どもの農山漁村体験の意義や効果的なやり方について理解しても、自分の関わる学校や地域で取り組むのは難しい状況がうかがえる。

図 5 送り側向けセミナー参加者アンケート

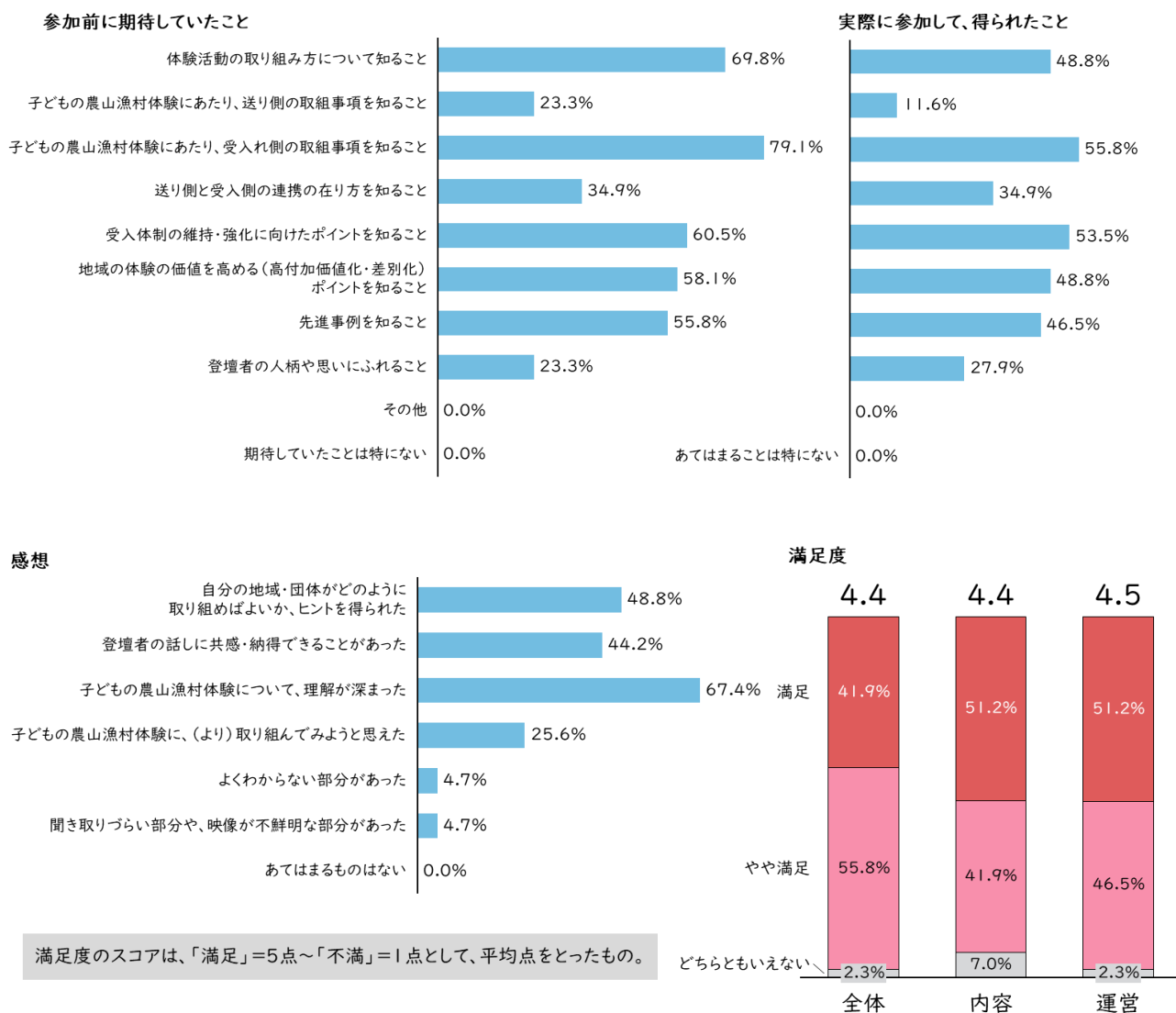


## <受入側向け>

参加前の期待と、実際に参加して得られたことは、いずれも「子どもの農山漁村体験にあたり、受入側の取組事項を知ること」が最も多く、参加前と実際に得られたことの傾向に違いはなかった。

感想としては「子どもの農山漁村体験について、理解が深まった」が2/3あまりで最も多く、「子どもの農山漁村体験に、(より)取り組んでみようと思った」は25.6%と、送り側よりはやや高くなったが、内容の理解は深まっても自地域の取組意向には直結しづらい様子がうかがえる。

図 6 受入側向けセミナーアンケート

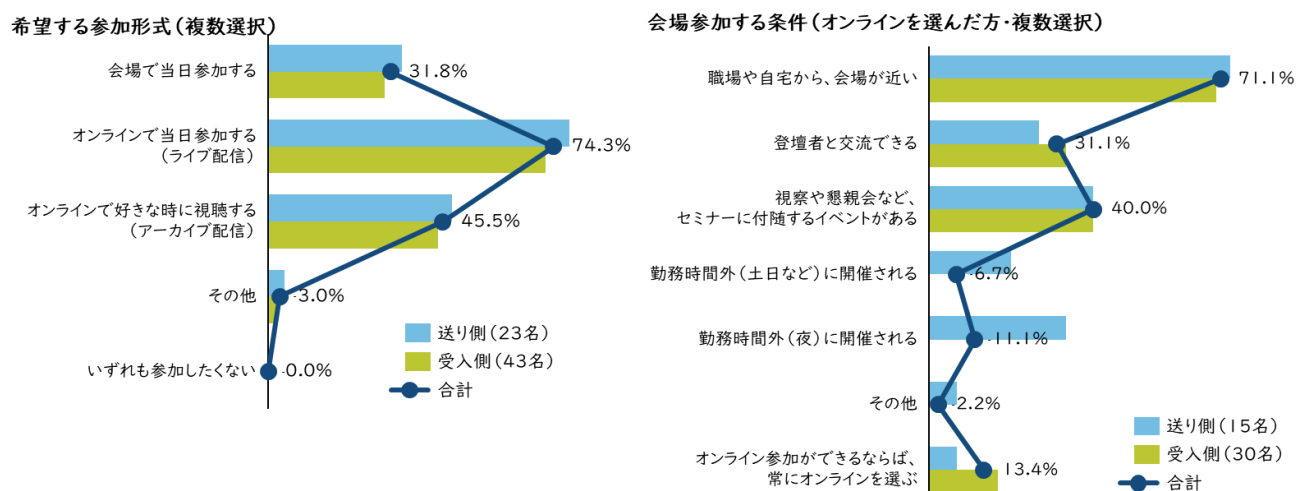


## <運営について>

セミナーは会場・オンラインを併用して実施した。今後のセミナーの希望する参加形式としては、「オンラインで当日参加する（ライブ配信）」が 74.3%と最も多く、「オンラインで好きな時に視聴する（アーカイブ配信）」が 45.5%と続いた。

オンライン（ライブ配信・アーカイブ配信）を希望する方に、どのような場合ならば会場参加を選択するか尋ねたところ、「職場や自宅から、会場が近い」が最も多くなった。子どもの農山漁村体験に取り組む方は全国に分散しており、オンライン開催が普及したことで全国から参加しやすくなった半面、会場が近い方以外はオンラインを選びやすくなる傾向がうかがえる。

図 7 会場参加の意向



### 第3章 子どもの農山漁村体験交流計画策定支援業務

#### (1) 概要

子どもの農山漁村体験に取り組む受入側地域において、送り側との連携を図りながら持続的に取組を進めるための計画を策定する。

本年度は、北海道雨竜郡幌加内町と、三重県度会郡大紀町の2地域において、計画策定を支援した。

#### <計画の記載事項>

|    |                      |    |                          |
|----|----------------------|----|--------------------------|
| 第1 | 目的                   | 第4 | 継続的な実施体制の構築等に係る課題        |
| 第2 | 地域の現状                | 第5 | 継続的な実施体制の構築等に係る課題の解決策    |
|    | ・ 小中高等学校の現状          |    | ・ 実施体制（関係部署・関係団体との連携を含む） |
|    | ・ 行政機関、教育委員会の体制      |    | ・ 情報発信                   |
|    | ・ 受入・送り期間（協議会等）の体制 等 |    | ・ 研修、学習会の実施 等            |
| 第3 | これまでの取組状況            | 第6 | 送り側、受入側等の目標数値の設定         |
|    |                      | 第7 | 今後の販売体制・販売戦略             |

## (2) 北海道幌加内町における計画策定支援

### ① 地域の概況・これまでの取組状況

幌加内町でこれまで取り組んできた「都市部の子どもが農山漁村体験等によって交流する教育活動」は、主に以下の2つである。

#### 1. 体験型宿泊研修施設「ふれあいの家まどか」を活用した、近隣の小・中学校の宿泊研修等の受入

小学校・中学校の宿泊研修が中心で、施設運営者自ら、そば打ち体験や自然観察等の体験や、バーベキュー等を提供している。また、北海道大学の施設と連携して“幻の魚”イトウの見学等も実施できる。道内近隣地域からの受入が多く、札幌や、首都圏等の大都市圏からの誘客拡大を検討している。

#### 2. 山村留学及び地域みらい留学による、都市部からの子どもの受入

幌加内高校・朱鞠内小学校の2つの学校で、全国から子どもの受入に取り組んでいる。特に朱鞠内小学校は児童数が少なく、北部地域の中心校存続のため、児童の継続的な確保が課題となっている。

一方、移住支援に向けては、移住者用の住宅やテレワーク環境の整備が進んでおり、親子での移住に関心をもつ方もいる。

### ② 当初の課題

大都市圏からの子どもの受入により相互理解を促進することや、移住定住につなげることなどを目指していた。特に、自然豊かな環境でのびのびと過ごすことが「リフレッシュ」「リスタート」「リボーン」につながるという「3R」の考え方のもと、様々な環境におかれた子どもの受入に取り組み、他地域との差別化を目指している。

また、山村留学にも取り組んでおり、移住者の獲得や関係人口の育成につなげ、地域の学校を維持することを目指しているため、まずは体験で幌加内町を訪れ、町内の学校への転校を検討するきっかけづくりが課題となっている。

### ③ 計画策定の経緯・体制図・外部有識者の派遣

幌加内町教育委員会を中心として、表3の体制で計画策定を進めた。

表3 幌加内町における計画策定の体制

| 主体                    | 役割                                                                                                                                          |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 幌加内町教育委員会             | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 計画の取りまとめ</li> <li>● 都市部の子どもにとっての町の魅力やプログラム内容の検討</li> <li>● 町内の学校と、送り側地域の学校のニーズ・課題を確認、調整</li> </ul> |
| 幌加内町地域振興室             | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 移住定住施策の主管部署として、既存の移住施策との連動を検討</li> </ul>                                                           |
| 幌加内町産業課               | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 観光施策の主管部署として、既存の観光施策との連動を検討</li> </ul>                                                             |
| 幌加内町観光協会              | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 町内の観光（宿泊・体験等）事業者をとりまとめ、受入環境整備の方向性を検討</li> <li>● 本取組に係る情報発信の検討</li> </ul>                           |
| NPO 法人シュマリナイ湖ワールドセンター | <ul style="list-style-type: none"> <li>● ふれあいの家まどかの管理者として、学校団体の受入に係る検討</li> </ul>                                                           |

計画の策定にあたっては、都市部の子どもの教育課題に精通した有識者等と連携を図りながら、表 4 のスケジュールで支援を進めた。

表 4 幌加内町における計画策定支援のスケジュール

| 日時                 | 開催手法         | 実施事項                                                            |
|--------------------|--------------|-----------------------------------------------------------------|
| 2023 年<br>6 月 23 日 | オンライン        | 初回打合せ（現状・課題・スケジュール等の聞き取り）<br>総務省と計画策定支援事務局との顔合わせ                |
| 10 月 3 日           | 現地           | 有識者の派遣（1 回目）                                                    |
| 10 月 6 日           | 現地           | 計画策定の現状について聞き取り、課題整理<br>「ふれあいの家まどか」視察                           |
| 10 月 30 日          | 現地           | 第 1 回計画策定協議会の参加（総務省・有識者・計画策定支援事務局）<br>幌加内町内の視察                  |
| 12 月 22 日          | オンライン        | 計画策定の経過について確認                                                   |
| 2024 年<br>1 月 29 日 | オンライン        | 計画のたたき台について確認（移住定住や観光に係る町の既存施策の確認など）                            |
| 2 月 15 日           | 現地／<br>オンライン | 第 2 回計画策定協議会の参加（有識者・計画策定支援事務局）<br>送り側候補となる自治体への訪問・意見交換（町職員・有識者） |
| 3 月 1 日            | 現地（出張）       | 送り側候補となる自治体への訪問・意見交換（町職員・有識者）                                   |

## 1) 計画策定協議会

幌加内町・町内の学校が中心となって、町としての子どもの受入に関する方向性や課題等を検討するために、「幌加内町子供農山漁村体験交流計画策定協議会」を設置し、年度内に 2 回議論を行った。

<計画策定協議会の主なメンバー>

- 朱鞠内小学校・幌加内小学校・幌加内中学校・幌加内高等学校
- 幌加内町観光協会
- 朱鞠内小学校山村留学推進協議会
- 幌加内町産業課、保健福祉課、地域振興室、朱鞠内支所
- 【外部有識者】開善塾教育相談研究所 藤崎 育子氏
- 【アドバイザー】幌加内町地方創生実行委員会 大山慎介氏
- 【事務局】幌加内町山村留学推進室幌加内町産業課、朱鞠内支所、保健福祉課、地域振興室

## 2) 有識者の派遣

子どもの受入に際し、幌加内町が目指す「3R」と親和性の高い不登校やひきこもりなどの子ども・家庭への支援の知見が豊富な、開善塾教育研究所の藤崎育子所長をお招きし、アドバイザリー等を依頼した。

藤崎所長は都市部の自治体で教育長を務めた経験もあり、送り側となりうる都市部の教育課題や、農山漁村体験に求めること、送り側・受入側の自治体間の連携のポイント等についてもアドバイスをいただくとともに、送り側候補となる都市部の自治体を複数紹介いただいた。

1 回目の現地訪問では、町内の学校を訪問し、校長先生らと意見交換を行い、不登校等の問題を抱える子どもの受入等についてアドバイスを行った。

2 回目の現地訪問では、農山漁村体験の受入を行う施設を見学し、子ども向けの自然体験プログラムの事例も紹介しながら、子どもの自信につながる体験の提供等についてアドバイスを行った。

また、送り側候補となる地域との打ち合わせも3回実施した。打合せの要点は以下のとおり。

#### (1 回目：首都圏 A 市)

幌加内町の豊かな自然環境に関心を持っていただいたものの、不登校児などではない子どもに限った取組を市として取り組むことは難しい。

幌加内町に A 市の子どもを派遣するだけでなく、相互に訪問する交流ができると良い。A 市は海に面しており、内陸の幌加内町の子どもが海を見る体験をしたり、幌加内町産そばを提供する飲食店で体験を行ったりと、相互交流のきっかけは色々な方法で提供できると考えている。

#### (2 回目：道内 B 市)

参加人数に限りがあるイベント(サマーキャンプ等)は公平性の観点から難しいのではないかと。一方で、不登校等の対象を絞った取組であれば、周辺の市町村と共同で送り出すことが望ましい。いずれにしても、市単独で取り組むのは難しいが、幌加内町教育環境・生活環境は、都市部の B 市にはない魅力があると感じた。

まず、幌加内町の子どもが B 市を訪れるなど、相互に交流できると良い。

なお、姉妹都市等による交流が既にある中で、幌加内町との交流をはじめするには、町出身者の縁など相応の理由があることが望ましい。とは言え、姉妹都市の交流も活発に取り組んでいるわけではなく、地域間交流の提案はありがたいと感じる。

#### (3 回目：東北地方 C 市) ※町教育委員会職員も同行

小・中学生が幌加内町に行くのは、移動距離・時間が長くなり、心身への負担が大きいのでは。一方で、市内の高校生と幌加内町の高校生が相互に交流する取組には関心がある。十分な検討の時間があれば、是非前向きに考えたいところ。

また、山村留学についても、市内の不登校の子どもが新たな環境でリスタートできる点で魅力を感じている。

3 市はいずれも都市部の地域だが、子どもの農山漁村体験の取組についての意見は少しずつ異なっている。相互交流の機会作り、公平性を担保するか対象を絞って案内するか、また送り側が近隣市町村で連携できないか、など、都市部の教育委員会関係者との意見交換を通して、様々な課題が抽出された。

### 3) 計画策定支援事業者との打ち合わせ

町内の受入を行う主な施設を見学したほか、幌加内町教育委員会関係者と意見交換を複数回行った。子供農山漁村交流推進支援事業をはじめ、複数の支援メニューを紹介しながら、計画の実行を支える仕組みを検討した。子供農山漁村交流推進支援事業については、送り側候補となる市の教育委員会に、藤崎氏が往訪され、意見交換を行ったが、実現にあたっては地域ごとの課題が見受けられた。

他方、受入に際しての特別交付措置は、送り側が指定されることなく活用でき、既存の取組も町が支援すること

に支援が受けられるなど、様々なメリットが考えられる。

また、移住や山村留学等、幅広い分野の施策と連動する方向性を検討することが望ましい。

#### 4) 探究学習に関する調査

幌加内町の顧問を務める大山慎介氏に、町内の資源やプログラムの整理と、教育プログラムとしての効果を高めるための示唆を頂くため、調査を依頼した。

大山氏は、藤崎氏がアプローチしている3R（「リフレッシュ」「リスタート」「リボーン」）を希望する「不登校児童生徒」から、さらに相手方の状況や環境にとらわれない幅広い形として、「幌加内町へ体験型宿泊研修（仮称）」のようなモデル事業として、他市町村へ紹介いただいた。

協議会委員へは、現状の課題として、本町の強み・弱みのリスト化、属人的な対応ではなく、受入自治体としての機能、仕組化の洗い出しを行った。

図 8 子どもの農山漁村体験交流計画にあたっての課題整理（抜粋）

| 幌加内町 子どもの農山漁村体験交流計画（案） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         | 令和6年2月15日現在 |
|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 第4 継続的な実施体制の構築等に係る課題   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 第5 継続的な実施体制の構築等に係る課題の解決策                                                                                                                                                |             |
| (1) 窓口を務める組織や人材の確保     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         |             |
| ① 関係部署、関係団体との連携強化      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         |             |
| ○教育機関との連携              | 送り側、受入側の学校や教育委員会などの事務局、町内関係機関や団体などと協働してプログラム内容を精査する必要があると考え、今後、関係部署や関係団体との連携をより推進していくことが必要となります。                                                                                                                                                                                                                 | 町内小中学校の児童・生徒による体験の実施を通じて、内容のモニタリングを進めることに取り組みます。<br>また、外部からの子どもたちの受け入れ時の町内小中学生との交流を合わせて実施することにも取り組みます。<br>幌加内高等学校や北海道大学等と連携し、学生による資源のさらなる掘り起こしや、プログラムの提案などを積極的に進めていきます。 |             |
| ○農林水産業・商工業・観光業との連携     | 現在の農業・林業、水産業等における地域課題、インフラ整備や自然環境の変化、地域での新しい取り組みを子どもたちに伝えたいと考えています。<br>町内での農業者等による体験プログラムの提供を充実することで、送り側へのアプローチの強化や魅力向上を図ることが必要であり、そのためには、町内の農林水産業・商工業・観光業者との連携を進めることが必要となります。                                                                                                                                   | 農業体験での、農業協同組合や育苗マイスター、体験受け入れができる「ふれあいの家まどか」との連携や、漁業体験での、朱鞠内湖淡水漁業協同組合やNPO法人などとの連携、幌加内町の商工業事業者、観光事業者などとの連携を進めます。                                                          |             |
| ○周辺自治体との広域連携           | 今後、新たな受入を進めていくためにも、幌加内町単独ではなく、周辺地域との連携した取り組みが必要であると考えます。<br>本町では、近隣市別市、釧路市、和寒町の1市3町が一体となった着地型観光推進協議会と日台親善協会を平成28年に設立し、観光マーケティング、プロモーション、国際交流を行っています。<br>これらの枠組みも活用しながら、子ども農山漁村交流事業の受入を推進することが有効であると考えます。<br>近隣であっても、住んでいるまち以外のことは知らないという子どもたちは多く、相互の理解を深め、道内外の小中学生及び高校生の受け入れについても、関係自治体との連携により、効果的な推進を図ることが必要です。 | 今後の受け入れを進めるにあたり、多様な体験プログラムの実施を可能とするため、また宿泊の受け入れの補完としても近隣市町村との連携を図ります。<br>道内外の小中学校及び高校から体験交流の受け入れについて、周辺自治体との連携を図ります。                                                    |             |
| ○都市部送り出し側地域との連携        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 子どもたちの交流を契機として、幌加内町と送り出し側の地域とのつながりの強化を図ります。<br>観光交流での相互交流、幌加内町の特産品販売や人的交流の取組を進めます。                                                                                      |             |
| ② 宿泊滞在の充実              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         |             |
| ○宿泊施設との連携強化と普及啓発       | 既存の体験型宿泊施設やスキー場など季節によって利用のばらつきが課題であると考えています。<br>安定した受け入れ態勢の整備と、普及啓発を進めることが必要です。                                                                                                                                                                                                                                  | 子どもたちの宿泊体験活動の受け入れに向けて、町内の体験型宿泊研修施設やスキー場などとの連携を図ります。<br>また、宿泊施設での地元食材の提供や集団学習の場の提供などについて、検討・調整を進めます。                                                                     |             |
| ③ 受け入れ窓口の充実            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         |             |
| ○受け入れ窓口の人材             | 受入側の地域住民や職員などの高齢化により、地域内の次世代を担う新しいキーマンの育成が必要な状況にあり、外部人材を含めた人材確保が必要です。                                                                                                                                                                                                                                            | 体験・宿泊の受け入れ窓口の構築<br>幌加内町での子どもたちの受け入れについて、体験プログラムと宿泊の調整、民泊事業の構築や新たな体験プログラム構築、事業PRや受入対応窓口となる体制構築を図ります。そのための人材確保・育成に努めます。                                                   |             |

また将来像は、送り側地域に住む児童生徒らが、幌加内町の事業メニューを体験し、そこで培った経験や知見を、将来の進学や就職に結びつく糧として、役立てていただきたいとの狙いがある。

ただ、送り側自治体とのマッチングは困難を極め、幌加内町への移動距離、受け入れ日数など課題は残したものの、令和6年度は送り側の自治体へアプローチ、令和7年度は、交流事業へ応募するビジョンとなった。

#### ④ 整理された地域の課題・課題解決の方向性

幌加内町で行う事業は、子どもの宿泊研修等（主に学校教育）と、山村留学のお試し・下見につながる体験（主に社会教育）の2通りに整理できる。それらの取組を、どのように地域課題の解決につなげていくかという点で、3つの課題を検討した。



#### 1) 宿泊研修等

##### <課題>

- **受入市場の拡大**・・・近隣地区に限らず、札幌市や大都市圏からの受入に取り組むことで、利用者の増加を図る。
- **安全・安心に係る情報発信**・・・ヒグマ対策について、敷地を電気柵で囲ったり、屋内の体験を充実させたりするなど、自然体験を安全に行う体制を構築しているが、ネガティブなイメージが一部で持たれている。
- **町と事業者の連携による実施体制の強化**・・・これまでふれあいの家まどかでの宿泊研修の受入は、送り側の学校や旅行会社等と、運営者（NPO 法人）との直接のやり取りが中心だったため、町の取組として本取組が位置付けられることで、プロモーションや営業活動の充実化や、受入コーディネート効率化、町内の体験を提供できる事業者などとの連携強化等が期待できる。

##### <課題解決等の方向性>

- **小規模グループや個人客への対応**・・・お試し移住体験の宿泊や、親子のサマーキャンプ等の体験で宿泊できることを訴求する。BBQや料理体験など、集団での食事提供以外の滞在方法を発信することで、観光の要素も重視する層に訴求する。
- **安全基準が守られていることを知らせる**・・・ヒグマ対策のガイドライン等の存在を知らせることで、安心・安全を訴求する（内容を開示するのは必須ではないが、全スタッフが理解していることや、ガイドライン等に沿った対応を徹底していることが伝わると良い）。
- **受入事業者の課題確認**・・・受入事業者にとって、子どもの体験を受け入れるに際して課題となっていることを抽出し、町が支援できることは協働する。たとえば、教育委員会と連携することで、体験の内容が教育的に有意義であることが伝わりやすくなる、学校行事として受け入れてもらいやすくなる、といった効果が期待できる。

#### 2) 山村留学のお試し

##### <課題>

- **受入ノウハウの構築**・・・朱鞠内小学校では「留学生」を受け入れた経験がなく、他地域から転入してきた子どもと接するのに自信がないと感じる関係者もいる。
- **他地域との差別化**・・・全国を通学区に設定して他地域からの子どもを募集する地域は多数あり、幌加内町ならではの魅力や、充実・安心した受入環境等などが求められる。
- **下見にあたって、学校との調整**・・・実際に学校の様子を見学できることが山村留学を前向きに考える上で重要となるが、学校に通っている子どもや教師への負担がかからないようにする方法を検討する必要がある。

- **受入環境の整備**・・・朱鞠内地区は商店や病院等が離れており、車の運転に不慣れな都市部からの移住体験者（親子）にとっては不便に感じる可能性がある。お試し移住用の住宅やコワーキングスペース等の整備が進んでいるが、運転免許を持たない子どもの移動手段の確保が課題となる。

#### <課題解決の方向性>

受入環境・学校との調整を考慮し、表 5 の通りお試しプログラムができる校種・期間を検討した。その結果、小学生をメインターゲットとし、まずは短期の体験プログラムで町の自然にふれてもらいながら、一部に学校の見学等も組み込むことが最も実現可能性が高いと整理された。

なお、北海道と本州で夏休み期間に 1～2 週間の差があるため、8 月下旬にプログラムを実施することで、本州の子どもが学校を欠席せずに幌加内町の学校を体験できる可能性は高い。しかし、実際に授業を受けるなど長時間学校を体験する際には、備品・消耗品・食事等のコスト負担や、内容の調整、町内の子どもにとっての受入の心理的な準備等が課題になると想定される。

体験に訪れた都市部の子どもと、町内の子どもが交流できる機会の創出には、町内の学校関係者も関心を持っているが、上記の課題をふまえて、受入体制を作っていくことが課題となる。特に、宿泊・飲食・体験等は事業として提供している事業者が町内にいる反面、子どもとの交流は町教育委員会がコーディネーターを務めながら、町内の子どもの状況を踏まえた受入を学校と密に連携して調整する必要がある。

表 5 幌加内町における「お試し山村留学」の方向性

|      | 留学のイメージ   | 短期の体験プログラム<br>(自然体験をメインとし、楽しさを重視したプログラムを提供)         | 長期の体験プログラム<br>(長期休暇を活用し、幌加内町の暮らしを体験いただく)                                         |
|------|-----------|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 保育園  | 保護者の移住を伴う | ・ 保育園児でも体験できるアクティビティ又は一時保育の環境が課題となる                 | ・ 「保育園留学」のような一時的な転校を想定した対応ができる仕組みをつくる必要がある。                                      |
| 小学校  |           | ・ 親子で体験するか、引率者とともに体験するか選べると良い(子どもの状態や、プログラムの性質に応じて) | ・ 一時的な転校もしくは欠席は難しいと考えられる。ただし、 <a href="#">北海道と本州の夏休み期間の差を活かしたプログラム実施</a> は考えられる。 |
| 中学校  |           |                                                     | ・ 保護者の移住体験を想定した際に、日中に子どもが過ごせる遊び場や、見守る人材、移動手段の確保などが課題となる                          |
| 高等学校 | 寮で集団生活    | ・ 子どもの自立心を育むプログラムを想定。異学年交流で年下の子どもを助ける体験なども効果的       | ・ ふるさとワーキングホリデー等の既存の施策を活用可能(長期休暇中に限られる)                                          |

### 3) 地域課題の解決につながる方向性

町の既存の施策について、「移住・定住・関係人口」「観光・交流」「教育」の3カテゴリーで整理したところ、山村留学については、意思決定に重要な役割を果たす保護者向けの施策が、移住定住や観光など、大人が自ら動くものと比べてやや少ないのではないかと考えられる(図9)。

また、教育の施策で高校生をターゲットと設定した際に、高校生の保護者がワーケーションで楽しめるプログラムを提示しつつ、ワーケーション等で訪れた保護者に「子どもを連れて来たい」と感じてもらうなど、相乗効果を生み出すことが望ましい。

※山村留学向け、地域みらい留学向け助成制度あり

図9 幌加内町の既存施策・ターゲット設定

|              | 移住・定住・関係人口                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 観光・交流                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 教育                                                                                                                                                                                                                       |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 保護者(大人)向けの施策 | <b>【情報発信】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>町HP・SNS</li> <li>各種広報イベント参加</li> </ul> <b>【お試し移住を支援】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>サテライトオフィス               <ul style="list-style-type: none"> <li>→ <b>企業向け</b>のテレワークツアー開催</li> </ul> </li> <li>お試し移住用物件               <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 家賃格安で利用可能</li> </ul> </li> <li>→ 家具や家電も装備</li> </ul> | <b>【情報発信】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>町HP</li> <li>観光協会HP/SNS</li> <li>NPOのHP・SNS</li> </ul> <b>【来訪機会の創出】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>ふるさと納税返礼品</li> <li>そば道場運営</li> </ul> <b>【体験メニュー等】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>釣りを活用した観光振興</li> <li>そばを活用した交流事業</li> </ul> | <b>【情報発信(保護者向け)】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>町HP・ちらし</li> <li>地域みらい留学HP</li> <li>山村留学HP</li> <li>CNのSNS等で発信</li> <li>生徒や保護者を通じたお知らせ等</li> <li>学校訪問</li> </ul>                                             |
| 子ども向けの施策     | <ul style="list-style-type: none"> <li>短期留学の受け入れ               <ul style="list-style-type: none"> <li>→ テレワーク中の子供短期留学受入</li> <li>→ 保育園児等の一次預かり</li> </ul> </li> </ul>                                                                                                                                                                                                                  | <b>【来訪機会の創出】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>宿泊研修の受入(近隣の<b>小・中学校</b>が主な対象)</li> </ul>                                                                                                                                                                                                             | <b>【情報発信(本人向け)】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域みらい留学HP・ポスター等(<b>高校生</b>向け)</li> </ul> <b>【受入体制の整備】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域みらい留学—高校生向け</li> <li>山村留学—小中学生向け</li> <li>保育園向け</li> </ul> |
| 町内の体制        | <ul style="list-style-type: none"> <li>幌加内町地域振興室</li> <li>保健福祉課</li> <li>教育委員会</li> <li>NPO法人よるべさ</li> <li>社会福祉法人恵信福祉会 双葉保育園</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>幌加内町商工課(観光協会)</li> <li>NPO法人(朱鞠内エリアの主な観光施設を運営)</li> <li>そば道場</li> </ul>                                                                                                                                                                                               | <ul style="list-style-type: none"> <li>幌加内町教育委員会</li> <li>町内各小学校・中学校・高等学校</li> <li>町PTA連合会</li> <li>社会福祉法人恵信福祉会 双葉保育園</li> </ul>                                                                                         |

写真:ふれあいの家まどかの外観／共用スペースを改装したコワーキングスペース



受入に際しては、既存の事業者と連携して、「子どもの団体」の受入に際して彼らが負担に感じる部分を町がバックアップし、山村留学等の施策と相乗効果を生み出すことが望ましい。

これまで、NPO 法人シュマリナイ湖ワールドセンターを中心に取り組んできた子どもの受入に町がどのように関与すればよいか、整理したのが図 10 である。

図 10 町と民間事業者の連携した受入の方向性

|           | 主担当者   | 誰に             | 何をするか                                                                                                                                      | 留意点・検討ポイント                                                                                  |
|-----------|--------|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| プログラム検討   | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程・人数・体験内容検討</li> <li>受入可能日、料金、人数など</li> <li>雨天時の代替策</li> <li>アレルギー対応、危機管理体制</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>現地の交通手段確保</li> <li>保険の手配</li> </ul>                  |
| 情報発信・申込受付 | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程・人数・体験内容聞き取り HP等</li> <li>受入可能日、料金、人数など調査</li> <li>雨天時の代替策提示</li> <li>アレルギー対応、危機管理体制確認</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>町の既存媒体だけで発信力は足りるか？</li> </ul>                        |
| 参加者との調整   | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程・人数・体験内容確認 申請書や電話</li> <li>料金、人数など確認</li> <li>雨天時の代替策調整</li> <li>アレルギー対応、危機管理体制</li> </ul>        | <ul style="list-style-type: none"> <li>配慮すべき情報、どこまで把握するか</li> <li>支払いはいつどうやって行うか</li> </ul> |
| 受入関係者との調整 | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程・人数・体験内容確認 申請書や電話</li> <li>料金、人数など確認</li> <li>雨天時の代替策確認</li> <li>アレルギー対応、危機管理体制確認</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>キャンセル・変更は何日前まで良いか</li> </ul>                         |
| 当日！       | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程・人数・体験内容確認（対面）</li> <li>料金、人数など最終チェック</li> <li>雨天時の代替策実施</li> <li>アレルギー対応、危機管理体制</li> </ul>       | <ul style="list-style-type: none"> <li>危機管理（ケガ・事故・災害等）発生時の対処</li> </ul>                     |
| 事後フォロー    | 町教育委員会 | 学校<br>体験・宿泊事業者 | <ul style="list-style-type: none"> <li>体験の感想等アンケート実施</li> <li>改善点等反省会の実施</li> <li>DM等の発信</li> </ul>                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>留学を考えてもらうためのメッセージの伝え方</li> </ul>                     |

## ⑤ 今後の方向性

本事業で策定した計画において、課題解決の方向性は以下のとおり設定した。子どもの農山漁村体験に町の事業として取り組むのは初めてだが、民間事業者等における実績は豊富にある。これらのプログラムと、受入に関わる地域住民や学校関係者をつなぎながら、誰かに負担が集中することなく持続的な受入に取り組むことが求められる。

表 6 策定した計画における取組事項

| 中項目                             | 小項目                                                      |
|---------------------------------|----------------------------------------------------------|
| (1) 窓口を務める組織や人材の確保              |                                                          |
| 関係部署、関係団体との連携強化                 | 教育機関との連携、農林水産業・商工業・観光業との連携<br>周辺自治体との広域連携、都市部送り出し側地域との連携 |
| 宿泊受入体制の充実                       | 宿泊施設との連携強化                                               |
| 受入体制の整備                         | 体験・宿泊の受入窓口の構築                                            |
| (2) プログラムの高付加価値化や他地域との差別化       |                                                          |
| 地域資源の活用によるプログラムの開発              | 地域住民・事業者の参画<br>地域資源の価値を高めるプログラム                          |
| 教育効果の高いプログラムの開発                 | SDGsに関連付くプログラム開発<br>教育関係者の参画                             |
| 地域間での連携強化のためのプログラムの開発           | 都市部側・農村部側の同世代の子ども同士の交流                                   |
| (3) 送り側とのマッチング・プロモーション・情報発信の充実化 |                                                          |
| ターゲット層への情報発信                    | ターゲットの設定、旅行会社などへのアプローチ                                   |
| 地域内での理解促進                       | 誇りの醸成と社会的意義                                              |
| (4) 体験や宿泊を提供する実践者の確保・育成、受入体制の整備 |                                                          |
| 地域での動機付け                        | 地域住民・事業者を対象とした研修会                                        |
| ガイド人材の育成                        | 企画運営・体験交流のできるガイド人材確保・育成                                  |
| (5) 子どもの農山漁村体験に取り組む事業費の確保       |                                                          |
| 事業費の確保                          | 国等の補助事業の活用                                               |

### (3) 三重県大紀町における計画策定支援

#### ① 地域の概況・これまでの取組状況

大紀町では 2013 年より体験民宿に取り組んでおり、20 件・最大 100 名の受入体制を築いている。農泊事業等にも取り組みながら、海外からの教育旅行や、国内（主に県内）の日帰り体験等を主に受け入れてきた。海・山・川／農業・漁業（海面・内水面）・林業の各種体験を取り揃えていることや、南海トラフ地震に備えた防災に注力していることなどが強みで、防災教育や SDGs 教育、探究学習等への取組を進めているところである。

しかし、コロナ禍で海外からの教育旅行が一時的な減少や、国内の教育旅行での行先変更などに対応し、安定した需要を確保するために、国内の宿泊を伴う農山漁村体験の受入に取り組むことが課題となっていた。

#### ② 当初の課題

- 受入体制に関する課題・・・国内の教育旅行を農家民宿等で受け入れる地域は 200 名ほどの定員を確保している地域が多く、大紀町の最大 100 名では送り側のニーズを満たせないおそれがある。体験民宿を増やすか、比較的小さいキャパシティでも対応できる送り側との連携を進めるか、いずれかの対応が必要である。
- 送り側のニーズ理解・・・国内・宿泊という新たな市場のため、海外との違いをふまえて分泊のオペレーションや安心・安全な体制の確保等に務める必要がある。
- 情報発信・・・はじめて取り組むため実績が不足しており、大紀町での宿泊研修につなげるためのプロモーションや、実施した事例の紹介による安心感の担保などが必要となる。

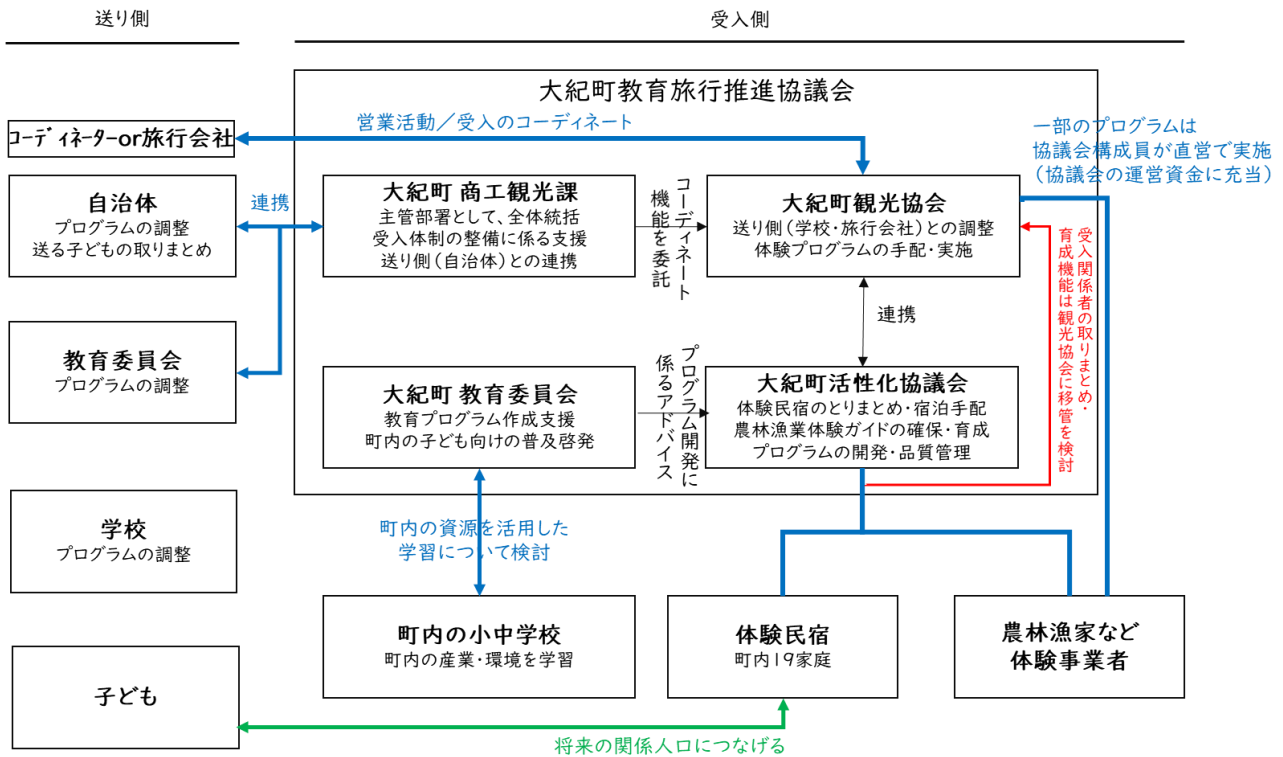
#### ③ 計画策定の経緯・体制図・外部有識者の派遣

大紀町商工観光課を中心として、表 7 の体制で計画策定を進めた。当初は図 11 のようにこれまで体験民宿のコーディネート等を中心的に担ってきた（一社）大紀町活性化協議会も参画することを検討したが、（一社）大紀町観光協会への完全な移行と、同協会が DMO（観光地域づくり法人）を目指すことを受け、表 7 のようなシンプルな形態となった。

表 7 大紀町における計画策定の体制

| 主体          | 役割                                                                                                                                                      |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大紀町商工観光課    | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 主管部署として、全体統括</li> <li>● 受入体制の整備に係る支援</li> <li>● 送り側（自治体）との連携</li> </ul>                                        |
| （一社）大紀町観光協会 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 送り側（学校・旅行会社）との調整</li> <li>● 体験プログラムの企画・手配・実施</li> <li>● 体験民宿の取りまとめ・手配</li> <li>● 受入れに係る人材育成、品質の確保など</li> </ul> |
| 大紀町教育委員会    | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育プログラム作成支援</li> <li>● 町内の子ども向けの普及啓発</li> </ul>                                                                |

図 11 大紀町教育旅行推進協議会の取組イメージ



計画の策定にあたっては、都市部の子どもの教育課題に精通した有識者等と連携を図りながら、表 8 のスケジュールで支援を進めた。

表 8 大紀町における計画策定支援のスケジュール

| 日時                 | 開催手法  | 実施事項                                             |
|--------------------|-------|--------------------------------------------------|
| 2023 年<br>6 月 27 日 | オンライン | 初回打合せ（現状・課題・スケジュール等の聞き取り）<br>総務省と計画策定支援事務局との顔合わせ |
| 7 月～9 月            | 現地    | モニターツアーの実施による新しいプログラムの開発支援                       |
| 9 月 28 日           | 現地    | 計画策定の現状について聞き取り、課題整理                             |
| 11 月 6 日           | 現地    | 第 1 回受入協議会の開催                                    |
| 12 月 11 日          | 現地    | 総務省・計画策定支援事務局による大紀町訪問・意見交換                       |
| 2024 年<br>2 月 8 日  | 現地    | 有識者による現地訪問・意見交換<br>計画策定支援事務局による計画の検討状況確認         |
| ～3 月               | 現地    | 探究学習の調査による、大紀町教育旅行パンフレットの制作                      |

### 1) モニターツアーの開催

大紀町では農林漁業体験を特色としていたが、自然体験のニーズが高まっており、町内での提供が可能な体制もできている。そのため、新たなプログラムとして町内の豊かな自然を活かした体験プログラムを開発・検討し、子どもの受入につながる課題・ポイント等を抽出した。大紀町の清流を体験し、河川環境に関心を持ってもらうとともに、これまでにない高付加価値なプログラムと位置付けるものである。

パックラフト体験（折り畳み式のカヤックによる川下り）と、ケイビング体験（洞窟の中の探検）の 2 種類を実施し、検証した内容は表 9 のとおり。

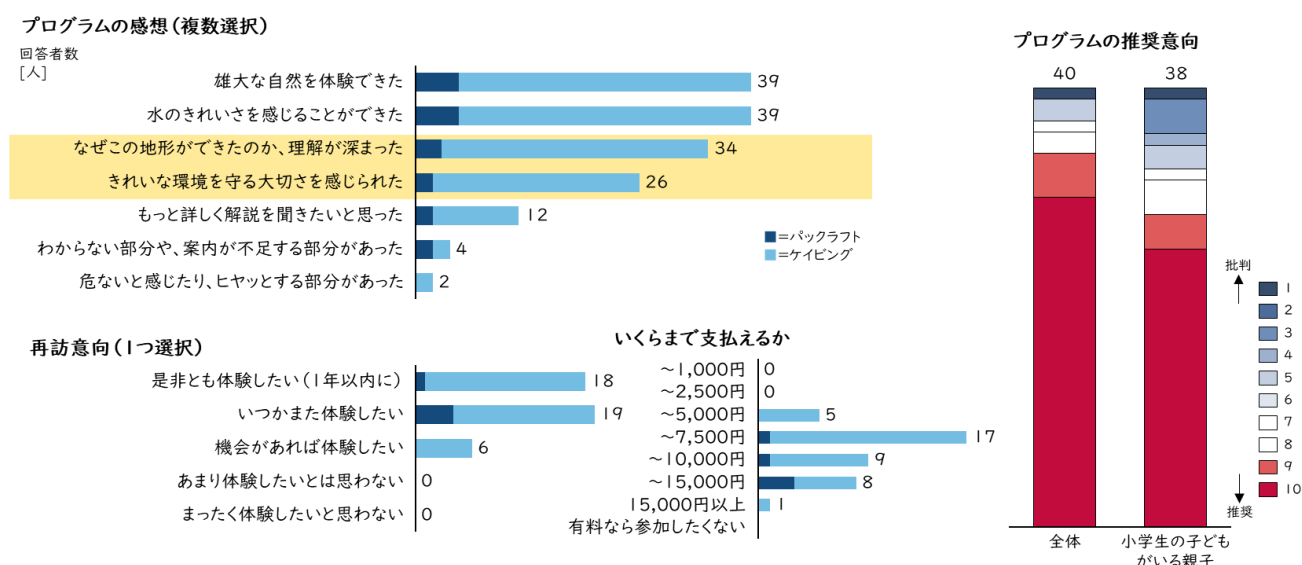
表 9 モニターツアー検証の観点・結果

| 観点                                                   | 実施結果                                                                                                                                                                                                                            |
|------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 内容                                                   |                                                                                                                                                                                                                                 |
| 「学び」と「楽しさ」が両立され、大紀町の自然環境（山・川・海のかかわり）を体感できる内容となっているか。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自然（地形・岩石など）について学べたという感想が複数あり、ガイドの解説の分かりやすさや親しみやすさは高く評価いただいている。</li> <li>・ 今後の「大紀町での宿泊体験プログラム」を検討する際には、他のプログラムとどのように連動させるかが重要になる（たとえば、きれいな水が海に流れることで海の環境が豊かに保たれていることを学ぶ体験など）</li> </ul> |
| 安全管理・運営                                              |                                                                                                                                                                                                                                 |
| コース全体が安全に配慮され、ガイドの目が十分に行き届くか。                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安全面も全体的に評価いただいております、子どもでも楽しめるという意見も少なくない。</li> <li>・ 一方で、パックラフトでは途中の声が聞き取りにくかったり、一部ハードな箇所があったりと、子どもには難しいのではないかと意見もあった。<u>中学生・高校生向けとして検討することが望ましい。</u></li> </ul>                       |
| 1 名のガイドでどこまで対応できるか。                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今回の最大受入人数は、ケイビングの 12 名だった。クラスの人数を基礎として、2 班に分かれるとしても 20 名の受入キャパシティは確保したい。補助ガイドをつける、用具を増やすなど、今後の対応が求められる。</li> </ul>                                                                     |
| 子どもの利用にあたって、一般向け以上に必要な配慮ができていますか。安全管理上の改善点はあるか。      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 上記に加えて、着替え場所の確保や、泳げない子ども・水や暗い場所がニガテな子どもへの配慮などが求められる。</li> <li>・ なお、代替プログラムは多数あるが、移動手段を確保し、体験時間をそろえられるかが提供時の検討事項となる。</li> <li>・ また、雨天時や寒い季節の対応もできると望ましい。</li> </ul>                     |
| 販売                                                   |                                                                                                                                                                                                                                 |
| 一般向けの体験料金として、いくらが妥当か（※社会教育等の団体を想定し、確認する）             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高い付加価値のついた体験は市場の認知度がまだまだ低く、「いくらまで支払えるか」の中央値は定価を下回った。</li> <li>・ 教育旅行は予算が限られている点も懸念されるが、社会教育活動であれば予算は比較的確保しやすく、保護者の理解が得られれば賛同いただけるのではないかと。</li> </ul>                                   |

モニターツアー参加者にはアンケートも実施した。主な結果は図 12 モニターツアー図 12 のとおり。プログラムの感想として「雄大な自然を体験できた」「水のきれいさを感じることができた」といった体験そのものの楽しさだけでなく、ガイドによる解説の影響で「なぜこの地形ができたのか理解が深まった」「きれいな環境を守る大切さを感じられた」を選択した方も多かった。全体として満足度が高く、推奨意向は小学生の子どもがいる親子に対してはやや下がるが、全体的に「友人・知人に勧めたい」と思う方が多かった。

一方で、「いくらまで支払えるか」を確認したところ、定価である 1 万円以上を選んだ方は半数以下となり、適切な値付けが課題となる。教育旅行においては、費用を支払う方と体験する方が分かれているが、予算の制約などから手頃なメニューを好む学校も多く、高い付加価値を感じて頂くとともに、学校向け市場に対してもターゲットを絞っていくことが求められる。

図 12 モニターツアー参加者アンケート結果(抜粋)



その他参加者アンケートの自由記述を通して、バックラフトはややガイドの声が届きにくい場所があること、ケイビングは9月でも肌寒いことや、暗い場所が苦手な子どもへのケアなどが指摘された。

また、提供事業者においては、ガイド1名が見られる参加者の人数に限りがある上、特にバックラフトは用具が行き渡ることが条件となるため、教育旅行としてはキャパシティの確保が課題となる。この点については、かなり前から予約が入る市場の特性を生かし、臨時のガイドを近隣地域から派遣する仕組みなどが考えられる。なお、少人数化・分散化が進む中で、コースの一つに自然体験を位置付けたり、20名ずつのグループに分かれて体験のローテーションを組むことで大人数ではできない濃密な体験を提供できたりすることも考えられる。

## 2) 探究学習に係る調査・パンフレットの制作

大紀町では、三重県の支援を受けて、探究学習のための事前学習シートを小学生向け・中学生向けの2種類制作したほか、事前学習動画として、町の紹介や受入事業者によるあいさつ、町の地域資源の説明等を盛り込んだ動画を制作した。

三重県においても教育旅行の誘致に力を入れているところであり、県と連携を図りながら、県内最大規模の体験民泊の受入ができることを強みとして大紀町の個性を発信していくことが求められる。

こうした背景を受けて、町内に多数存在する体験プログラムを、SDGs 学習、防災学習、探究学習などのテーマ別に再整理し、モデルコース等の形で提示することを目的に、コンテンツの調査と取りまとめを実施した。

構成としては、プログラムの紹介と体験民宿の紹介を中心に、図 13 をもとに検討した。

図 13 教育旅行パンフレットの台割(案)

|                       |                                                    |                   |                                         |                                    |
|-----------------------|----------------------------------------------------|-------------------|-----------------------------------------|------------------------------------|
| タイトル<br>キャッチコピー<br>写真 | 写真<br>教育旅行コンセプト<br>(大)<br>ここ大紀町ならではの<br>学びある体験を(例) | 写真<br>目次          | 教育旅行コンセプト<br>(詳細)<br>・三重県大紀町が<br>選ばれる理由 | ・それぞれの体験から<br>学んでほしいこと<br>・SDGs など |
| 表紙                    | P1                                                 | P2                | P3                                      | P4                                 |
| モデルコース<br>1泊2日        | モデルコース<br>2泊3日                                     | 農業体験              | 林業体験                                    | 漁業体験                               |
| P5                    | P6                                                 | P7                | P8                                      | P9                                 |
| 歴史文化体験                | 防災ツーリズム                                            | ふるさと村<br><br>井戸ばた | 上野屋<br><br>きせいまる                        | むかしのくらし<br><br>木木屋                 |
| P11                   | P12                                                | P13               | P14                                     | P15                                |
| ふじた<br><br>こころ        | いくま<br><br>アトリエトミカ                                 | 東作塾<br><br>いなか屋   | むさし<br><br>いづほ                          | さんずい<br><br>えんがわサロン                |
| P17                   | P18                                                | P19               | P20                                     | P21                                |
| 入村式・離村式<br><br>緊急連絡体制 | 体験者の声<br><br>お問い合わせ                                | MAP               |                                         | アクセス<br><br>事業主                    |
| P23                   | P24                                                | P25               | P26                                     | 裏表紙                                |

### 3) 専門家の派遣

国内教育旅行の受入にあたって、農家民宿・教育旅行の専門家で大紀町の支援経験も豊富な、(一財)都市農山漁村交流活性化推進機構の花垣紀之氏にアドバイザーを依頼した。

#### <実施概要>

- 日時:2024年2月8日(木)13時30分～
- 場所:(一社)大紀町観光協会 会議室
- 参加者:大紀町商工観光課様、(一社)大紀町観光協会様

#### <主な内容>

大紀町における教育旅行受入の課題について対して、同機構で作成された事例集等をご用意いただきながら、以下の内容でお話し頂いた。

#### 1. 民泊の受入

受入可能人数が100名となっており、大規模校の受入は難しい。

- (ア) 小中規模校の受入…生徒数を確認し、学校に個別に営業活動を行うなど
- (イ) 広域分散・コース制・希望制…私立学校でみられることが多く、コースの一つとして提案できる
- (ウ) 社会教育プログラム等…大紀町と関わりのある地域や、民間団体(スポーツ団体等)の受入を行う

#### 2. 民泊以外の受入

一般の宿泊施設や、近隣地域の宿泊施設等と連携して体験を受け入れることも可能。

- (ア) 学校向けの体験学習…日帰りの体験を受け入れる
- (イ) 社会教育プログラム等…民宿等の宿泊施設での受入を検討する

#### 3. 交流推進支援事業の検討状況について

- (ア) 都市部の学校のニーズ…市区町村ごとの予算や距離の制約などを確認する必要がある。
- (イ) キャンプ場の活用…防災体験などであれば可能だが、事例は多くない

### 4) 計画策定支援事業者との打ち合わせ

計画の策定を通して送り側地域との連携を目指していたため、送り側地域の候補について、大紀町・大紀町観光協会と協議した。

- 東京都 A 区…子どもの農山漁村体験に積極的な地域  
姉妹都市などの関連性がない地域において、新たに交流を始めるのは相応の理由が必要で、難しいのではないかと。また、区営の宿泊研修施設を農山漁村地域に保有しており、そこよりも遠い場所に行くことは難しい。
- 三重県 B 市…大紀町に日帰りで訪れている学校がある市  
学校と大紀町の間の取組であり、これまで B 市教育委員会を介することがなかったため、交流推進支援事業に取り組むのは難しいのではないかと。
- 三重県 C 町…小規模な学校があり、受入のターゲットとして検討  
学校と大紀町との連携による取組であり、C 町教育委員会はこれまで関わってこなかったため、交流推進支援事業に取り組むのは難しい。

これらの結果を共有しながら、国内の教育旅行（宿泊）受入にあたっては、送り側の自治体を介さずに旅行会社経由で問い合わせを受けられる仕組みを作ることや、社会教育団体の受入に取り組むことなども検討を進めている。

また、定期的な打ち合わせと併せて、総務省とともに大紀町を訪問した。大紀町の体験民宿では、三重大学等の学生と連携して地域活性化に取り組む施設があるほか、事業を継承したいという若い世代も現れている。農山漁村体験の新しい展開について、実践者と意見交換を行った。

【写真】 総務省と大紀町関係者による意見交換の様子／農家民宿の視察・意見交換



#### ④ 整理された地域の課題・課題解決の方向性

計画策定事業を通して整理された課題は、主に以下の４点。

##### 1. 宿泊受入人数の不足

体験民宿による教育旅行は 200 名規模のキャパシティが求められることも少なくない。大紀町がこれまで取り組んできた海外の教育旅行は、数十名程度と比較的小規模だったため、キャパシティを増やす方策について検討することが望ましい。

（解決の方向性）

- ・ 小中規模の学校に絞った受入を行う・・・少子化や分散化・コース選択制等により受入の可能性は高い
- ・ 広域連携による地域全体のキャパシティ確保・・・周辺地域の農家民宿では、コーディネート機能が不足しており、品質確保等も課題。また、大紀町観光協会が広域のコーディネートも担うのは負荷が大きい。
- ・ キャンプ場の活用・・・体験民宿との分泊や、防災学習の一環での宿泊などを通して、町内の施設を活用する。
- ・ 受入家庭の確保・・・農林漁家に限らず町内の希望する方が開業できる仕組みを検討する。

##### 2. 営業体制の構築

海外からの教育旅行は県からの問合せへの対応が中心だったため、地域として営業活動を行う体制を作っていく必要がある。

（解決の方向性）

- ・ Web サイトやパンフレット等による情報発信の強化・・・関心のある方が必要な情報を得られるよう、最新の情報を提供する仕組みを構築する。

- ・教育委員会と連携した町としての営業体制・・・大紀町教育旅行推進協議会では、教育委員会が関与することとて、自治体間の連携による教育旅行において、町が十分に関与しており教育的効果が担保されているという安心感を提示できる。

### 3. 高収益化

体験民宿の事業継承が課題となっており、収益を確保できる仕組みが求められている。

（解決の方向性）

- ・体験民宿の単価上昇・・・物価高騰・人手不足に応じて適切な対価を得られる仕組みを作る。
- ・手配に係る手数料の収受・・・大紀町観光協会が旅行業の開業をする予定であり、これまで体験プログラムの提供のみだった収入を、宿泊の手配に係る手数料からも得られるようになる。コーディネート機能の収益を確保することで、地域全体の質の向上につながる可能性がある。
- ・新たなプログラムの開発・提供・・・自然アクティビティなど、これまでにない高付加価値な体験を提供する。  
⇒ 今年度実証したパックラフトとケイビングは、小規模の団体向けのものであり、小規模な学校をターゲットとした場合に有効。また、中規模の学校団体においては、プログラムのローテーションを組むか、探究学習と絡めて生徒の興味関心に応じてプログラムを選択制にするなどによって実施可能。

### 4. 探究学習への対応

高収益化の観点や、他地域との差別化の観点から、地域でできる探究学習を発信することが求められている。大紀町の農山漁村体験は、農林漁業体験や防災ツーリズムなど、学びの要素が確保されており、探究学習の親和性が高いと考えられる。また、事前・事後の学習素材は既に整備されており、これらの活用による効果が期待できる。

（解決の方向性）

- ・探究学習の学習コンテンツを活用した、事前・事後学習のパッケージを提案する
- ・探究学習のテーマ設定やモデルコースについて、パンフレット等で情報発信する

## ⑤ 今後の方向性

前項に示した課題に対し、以下の7つの施策を検討した(表10)。

表10 課題に対する今後の方向性

| 取組内容                                                                   | 課題<br>① | 課題<br>② | 課題<br>③ | 課題<br>④ |
|------------------------------------------------------------------------|---------|---------|---------|---------|
| <b>ホームステイによる受入の確保</b><br>体験の提供が難しい家庭も受入に参画してもらい、地域の宿泊定員を増やす            | ●       |         |         |         |
| <b>キャンプ場との連携</b><br>防災学習を活用した新たな体験として、キャンプ場の宿泊を提供する                    | ●       |         |         |         |
| <b>小中規模校をターゲットとした誘客</b><br>県内を中心に、生徒数の少ない学校に営業を行う                      | ●       |         |         |         |
| <b>日帰りで来訪していた団体に対する宿泊行事の提案</b><br>パンフレットを通してモデルコースを提案し、宿泊での来訪に切り替えてもらう |         | ●       |         |         |
| <b>社会教育活動を対象とした誘客</b><br>スポーツ合宿等に自然体験を組み合わせたプログラムを提供する                 | ●       |         | ●       |         |
| <b>大紀町教育旅行推進協議会による営業体制の確立</b><br>送り側地域とのやり取りを中心に教育委員会も支援し、アプローチを充実化    |         | ●       |         | ●       |
| <b>既存の学習コンテンツの活用</b><br>件の事業で整備した教材等を活用し、探究学習を推進する                     |         |         |         | ●       |

## 第4章 交流推進支援事業支援業務

### (1) 概要

交流推進支援事業（モデル事業）は、送り側・受入側相互の連携によって本取組を開始する地域を対象に、受入ノウハウ・改善点を理解したり、取組の効果を確認したりすることを目的として、実際に子どもの交流を行うものである。

モデル事業の支援業務として、子どもの農山漁村体験実施に際しての助言や、効果の確認等、継続にあたっての課題の検討などを実施した。

|       |                              |                      |
|-------|------------------------------|----------------------|
| 実施地域  | 国立大学法人<br>奈良国立大学機構* ➡ 奈良県下市町 | 神奈川県 ➡ 群馬県中之条町       |
| 位置づけ  | 学校教育／社会教育                    | 学校教育                 |
| 参加者   | 小学生                          | 高校生                  |
| 日数    | 1泊2日                         | 1週間                  |
| 体験内容  | 林業（伐採・加工）、郷土食                | 農業（野菜・花き・畜産）         |
| キーワード | SDGs 学習、探究学習、異学年交流           | デュアル教育、インターンシップ、専門教育 |

\*奈良県下市町と包括連携協定を締結しており、モデル事業の申請は送り側も下市町となっている。

## (2) 奈良県下市町における取組

### ① 事業の背景・目的

下市町においては、平成 28 年より奈良女子大学（現在は国立大学法人奈良国立大学機構が継承）と協定を締結し、「奈良型エクステンション」による大学と地域の協働を進めている。下市町には「奈良女子大学下市アクティビティセンター」が設置され、地元で活躍する方を特任助教に任命し、地域と大学を結ぶ研究・教育・なりわい創出活動を行っている。

アクティビティセンターは学生が下市町を訪れた際の活動拠点と、教職員・学生と地元住民が交流を深める場としての機能を果たしている。これまでは大学生が下市町を訪れて研修や交流、地域活性化等に取り組んでいたが、付属小学校との交流は初めてのことであった。以下の通り地域への貢献を目指して、子どもの農山漁村体験に取り組んだ。

- **体験型学習の提供**：座学(知識)と体験(実習)が一体となった生きる力につながる経験をする
- **郷土愛**：自分たちの住んでいる地域、関わりのある地域を身近に感じ、愛着を育む
- **教育効果**：同年代・大学生・地域住民との体験・交流を通した双方の児童生徒の「自立心・規範意識・自ら学ぶ力・コミュニケーション力等（非認知能力）」の育み
- **受入調整のワンストップ化、知見・ノウハウの蓄積**：「下市町賑わい創出協議会」による交流体験受入調整機能(コーディネーター機能)の体制構築
- **国内観光客・インバウンドの受入、移住体験等の取組の活発化**：受入施設(移住促進ゲストハウス、体験プログラム提供施設等)間の連携強化、受入施設の受入対応力の向上、新たな体験プログラムの開発
- **単年度で終了しない仕組みの構築**：都市部と農山村地域の交流体験事業の継続実施

受入にあたっては、下市町地域づくり推進課と、2023 年 5 月に発足した「下市町賑わい創出協議会」、奈良女子大学下市アクティビティセンターの 3 者が連携して取り組んだ。

表 11 下市町における本取組の実施体制と取組事項

| 下市町地域づくり推進課                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 奈良女子大学下市アクティビティセンター                                                                                    | 下市町賑わい創出協議会                                                                                        |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域とのつながりの活用</li> <li>・ ワークショップ運営のノウハウを応用</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 奈良女子大学との関係性活用</li> <li>・ 各事業所との体験をコーディネートしたノウハウの応用</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 柔軟・スピーディにモノ・コトをつなぐ</li> <li>・ 協議会メンバーとのつながりを活用</li> </ul> |
| <p>&lt;送り側としての業務&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 参加者募集（各学校で参加者募集を行い、それを集約）、各学校・下市町役場（総務課・教育委員会事務局）との各種調整 等</li> </ul> <p>&lt;受入側としての業務&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受入施設手配、交流体験プログラム手配、移動車両手配、その他必要品等の手配、交流体験時のアテンド、受入施設・関連団体・下市町役場（地域づくり推進課）等との各種調整等</li> </ul> <p>&lt;その他業務&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交流体験プログラムの企画・運営、交流体験事前事後のオンライン交流の企画・運営 等</li> </ul> |                                                                                                        |                                                                                                    |

## ② 実施した内容

### <プログラムの検討>

将来の下市町の関係人口創出や移住者の確保につながるよう、下市町での出来事が心に残る体験を検討した。他地域にはない魅力や学びの要素として、森林の伐採から加工までの加工を体験することを中心とし、SDGs教育につながるプログラムとした。

### <事前の準備>

下市町・下市町賑わい創出協議会では、子どもの受入に向けて関係各所との調整に取り組んだ。

| 相手方                     | 調整事項                                                                                                                                      |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 体験受入先<br>(木材加工など)       | <ul style="list-style-type: none"> <li>事業内容の説明</li> <li>実施日の調整</li> <li>当日の流れの調整</li> </ul>                                               |
| 宿泊先<br>(ゲストハウス)         | 上記に加え、 <ul style="list-style-type: none"> <li>宿泊者情報の共有</li> <li>朝食づくりの協力依頼</li> </ul>                                                     |
| 下市あきつ学園<br>(受入側地域の子ども)  | <ul style="list-style-type: none"> <li>日程調整、参加者の確認</li> <li>通常授業との調整</li> <li>児童のアレルギー確認</li> <li>しおりの配布</li> </ul>                       |
| 奈良女子大・<br>奈良教大<br>附属小学校 | <ul style="list-style-type: none"> <li>教師の現地視察</li> <li>児童のアレルギー確認</li> <li>参加者の募集／確認</li> <li>しおりの配布</li> <li>事前資料の配布／事前授業の実施</li> </ul> |
| 奈良女子大学<br>(当日のヘルパー)     | <ul style="list-style-type: none"> <li>学生スタッフの募集</li> <li>事前説明会</li> </ul>                                                                |

### <実施概要>

|      | 奈良教育大学附属小学校    | 奈良女子大学附属小学校         |
|------|----------------|---------------------|
| 日程   | 2023年8月23日～24日 | 令和5年10月             |
| 参加者  | 小学4～6年生 28名    | 小学5年生 2クラス(32名・31名) |
| 募集方法 | 希望制            | クラス単位で実施            |

### <当日の行程>

| 1日目   |                   | 2日目   |                                          |
|-------|-------------------|-------|------------------------------------------|
| 8:30  | 学校をバスで出発          | 6:30  | 起床                                       |
| 10:00 | 下市町到着(トイレ休憩)      | 7:30  | 朝食(茶粥)                                   |
| 10:40 | 林業体験              | 8:30  | 朝の散歩(マインドトレイル)                           |
| 12:30 | 昼食(役場内・弁当)        | 10:00 | トイレ休憩                                    |
| 13:20 | 木についての学習・役場見学     | 10:30 | 柿の葉寿司作り体験・日本最古の寿司屋の歴史話<br>★下市あきつ学園の児童と交流 |
| 14:00 | 原木加工場の見学          |       |                                          |
| 15:45 | トイレ休憩             |       |                                          |
| 16:00 | 自由時間(ゲストハウス)      | 11:50 | 昼食(弁当)                                   |
| 17:00 | 3つのゲストハウスに分泊、入浴準備 | 13:00 | 割り箸づくり・鉋削り体験                             |

|       |              |       |           |
|-------|--------------|-------|-----------|
| 18:00 | 夕食(カレー)      | 14:40 | トイレ休憩     |
| 19:00 | 入浴(下市温泉)     | 14:50 | バスで下市町を出発 |
| 20:00 | 3つのゲストハウスに分泊 | 16:30 |           |
| 21:00 | 就寝           |       |           |

### ③ 事前ヒアリングの結果・課題

2023年7月に下市町を訪問し、受入側・送り側関係者と意見交換を行った。双方が同じ町内で活動していることや、小学生以外を対象とした類似のプログラムの経験があることなどから連携はスムーズにできてくることを確認できた。

具体的には、2023年に発足した下市町賑わい創出協議会の活動内容や、閉校した学校を活用した「下市集学校」を拠点にした企業連携の取組、国立大学法人 奈良国立大学機構との連携の取組について説明頂いたのち、今回の受入を行うゲストハウス3カ所を順番に訪問した。

下市町では古民家・廃校・公民館など、多様な建物を活用したゲストハウスが点在しており、それぞれのオーナーによって、交流・滞在の場として工夫された運営が行われている。ゲストハウスのオーナーによる施設の案内等も受けながら、提供する宿泊体験の内容を確認した。

写真：閉校した小学校を活用したゲストハウス／古民家を改装したゲストハウス



#### <事前に抽出された課題と対応>

- 子どもの受入経験がないため、大人用のプログラムが子どもに適合するか確認する必要がある。  
例) 徒歩での移動時間、扱う物の重さや数量、食事を作るペースなど
  - ➡ 奈良女子大学・奈良教育大学の専門家と相談しながら、子どもに負荷の少ない受入を再確認した。
  - ➡ 林業体験では、斧が重くて扱いづらいという意見が出たため、奈良女子大学附属小学校の受入にあたってはのこぎりのみで作業した。なお、ヘルメットや用具等は、森林技術センターから借りた。
- ゲストハウスのシェアキッチンでは、大きさや台の高さなどが子どもに合わない可能性がある。
  - ➡ 朝食の茶粥は大人(ゲストハウススタッフ・町職員)が作って提供することにした。

## <その他確認事項>

- 体験提供のバックアップ体制（役場に緊急連絡対応ができるようにするなど、現場以外の拠点確保）
- 雨天時の代替プログラム
- アレルギー対応（食物だけでなく、枕のそば殻など）
- 障がい・怪我のある子どもへの対応
- お風呂やトイレなどを個別に使えるようにするなど、多様なニーズをもつ子どもへの対応

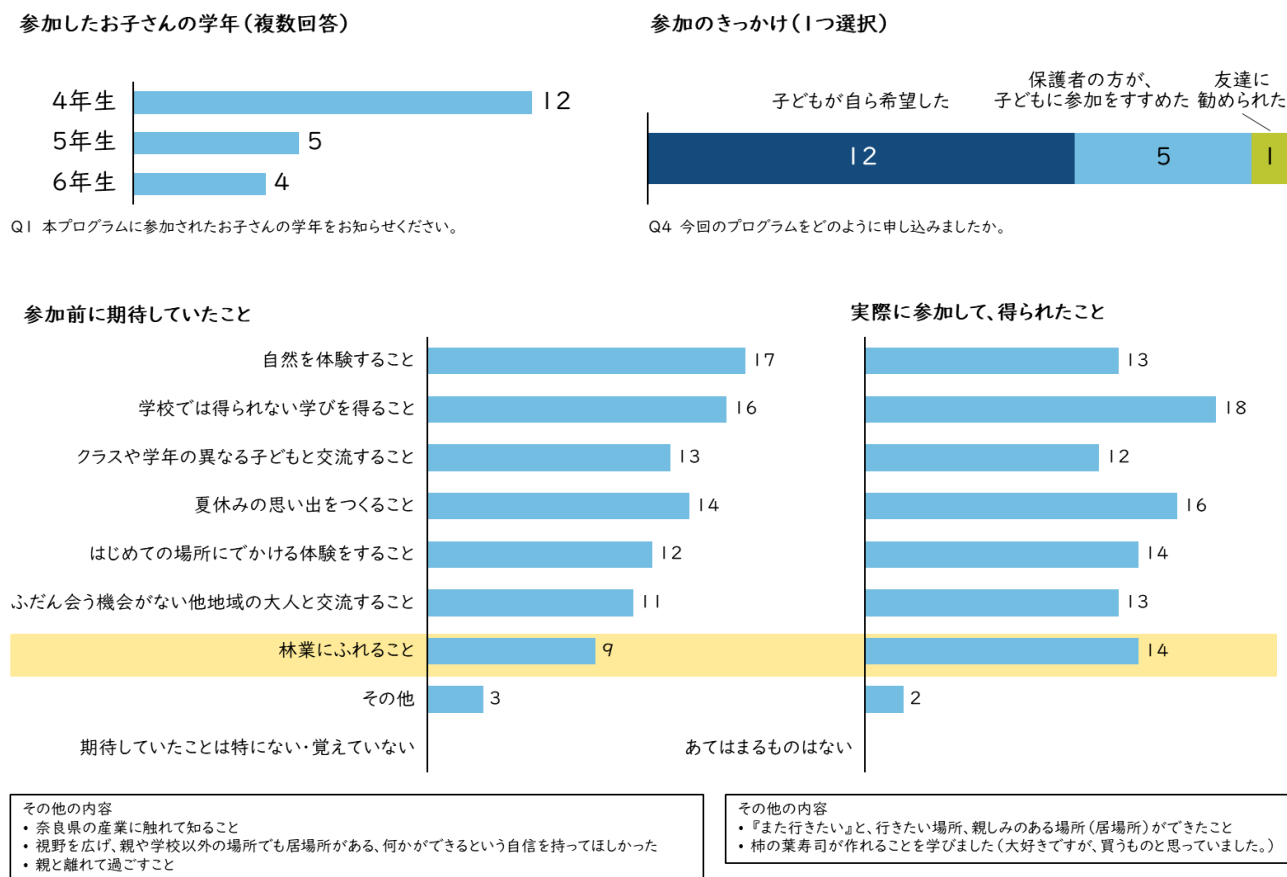
## ④ 事後調査の結果・課題

本取組の成果を高めるために、交流実施後に受入側関係者へのヒアリングと、参加した子どもの保護者を対象としたアンケート調査を実施した。受入側においては、子どもの状況に応じてきめ細かく対応できて無事に交流を終えられたことが大きな成果となった。送り側においては、木や自然環境、地域課題などへの子どもの関心が高まったり、自立心が育まれたりといった効果を確認できた。

## <奈良教育大学附属小学校>

奈良教育大学附属小学校では、小学 4～6 年の希望する子どもが参加するプログラムを実施した。学校を通してプログラムへの感想・要望等を聞くためのアンケートを実施し、保護者 19 名（きょうだいで参加した子どももいるため参加者数では 21 名分）から回答をいただいた。

図 14 奈良教育大学附属小学校保護者アンケートの結果（1/2）

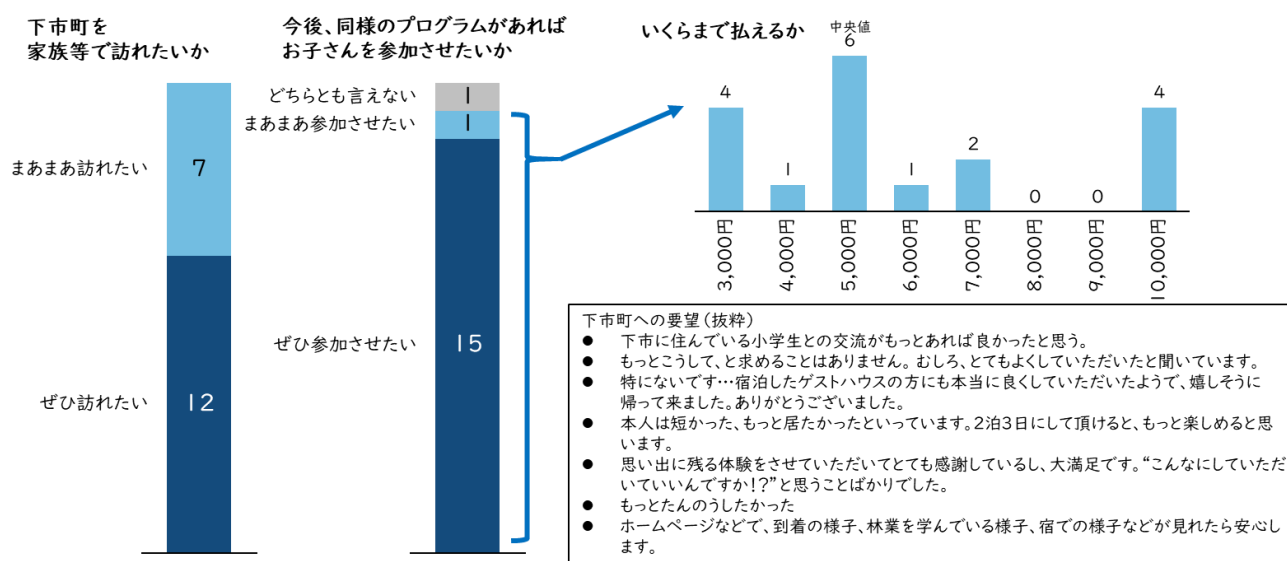


参加前に期待していたことと、実際に得られたことを比較すると、「林業にふれること」が増えており、はじめは「自然体験」「交流」などのイメージで参加したところ、地域の産業や文化を学ぶことができたのが収穫になったといえる。

下市町を家族等で訪れたいか尋ねたところ、全員が肯定的な回答をしており、本プログラムの継続意向も高い水準となった。「プログラムには満足しているが、こんど参加するならば別のプログラムが良い」という意見が想定されたが、大半が「今後、同様のプログラムがあれば、子どもを参加させたい」と回答した。

一方、このプログラムにいくらまでなら支払えるか確認したところ、本事業を活用しない場合に想定される料金を下回る水準の回答が目立ち、適正な値付けと価格に見合う価値を感じて頂く仕掛けが今後の課題として現れた。

図 15 奈良教育大学附属小学校アンケート(2/2)



Q11 今後、ご家族などで、下市町を訪れてみたいと思いますか。

Q12 来年度以降、同様のプログラムがあれば、お子さんに参加させたいですか。

Q10 受入を行う地域(下市町)に対して、「もっとこうしてほしかった」と感じることはありますか。あれば、ご自由にご記入ください。

自由記述等でみられた保護者のコメントは、以下の5点に集約される。

- 子どもだけで宿泊する体験を通して、自信がついた・自立心を育むことができた
- 学校から送り迎えしてもらえることで、安心できた・保護者の負担が軽減できた
- ふだんふれる機会のない自然体験・林業体験ができて、貴重な機会だった
- 受入側の人たちに親切にもらえてよかった。また行きたいと思った。
- 参加料が手頃でありがたかった

学校単位の交流であったため、学校からの送り迎えがあったことなどが安心感を提供できた。また、8月の実施だったため、下市町の受入関係者が冷やしたお茶を車に乗せて同行するなど、熱中症対策を丁寧に行ったことや、ゲストハウスでの交流など、きめ細かな対応も評価頂いた。

一方で、参加料が手頃であった点については、今後実費(+協議会の運営に必要な収益)を支払ってもらえるよう、受入側においては適切なコスト算定を行うこと、送り側に向けては価格に見合う価値を参加者の声や写真などで提示することなどが求められる。

## <奈良女子大学附属小学校>

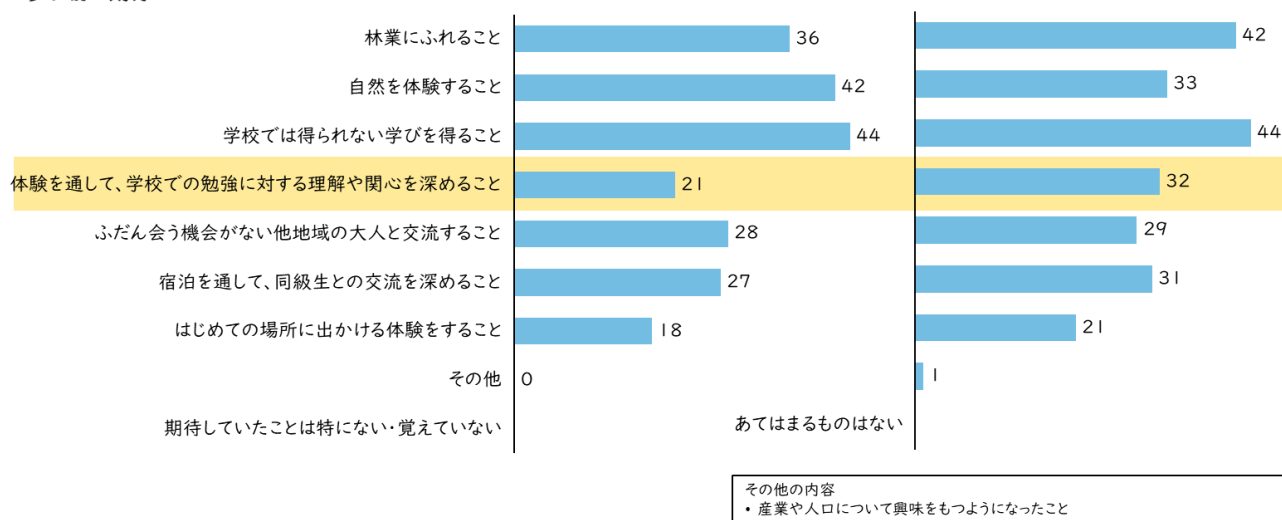
奈良女子大学附属小学校は、小学 5 年生がクラス全員で参加する形式であった。学校を通して保護者にアンケートを配布いただき、51 名から回答を頂いた。

学校の授業と連動して事前学習も行っただけの参加であったため、「林業にふれること」への期待は事前から高かった。一方で「体験を通して、学校での勉強に対する理解や関心を深めること」が事後で増えており、単に「見て学ぶ」「体験する」だけでなく、学校の学びに対しても理解・定着が深まる往還的な効果を実感頂けたことがうかがえる。

学校での案内や事前学習のほかに、「下市町の林業や生活文化について」を自分で調べた方が 29 名おり、子どもの学習意欲の高さや、体験を楽しみにしていた様子が確認できる。

図 16 奈良女子大学附属小学校アンケート(1/2)

### 参加前に期待していたこと

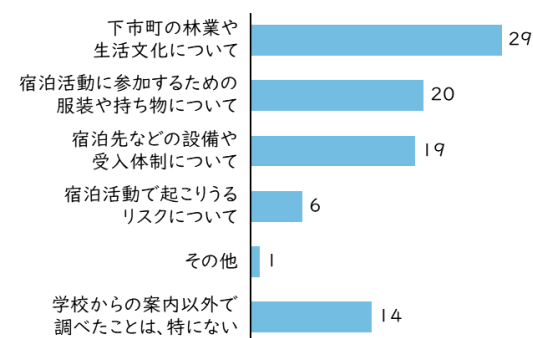


Q2 今回のプログラムに申し込めば、期待していたことをすべてお選びください。 Q3 参加後にお子さんの様子を見て、プログラムを通して得られたと感じるものを、すべてお選びください。

### 案内は十分だったか。



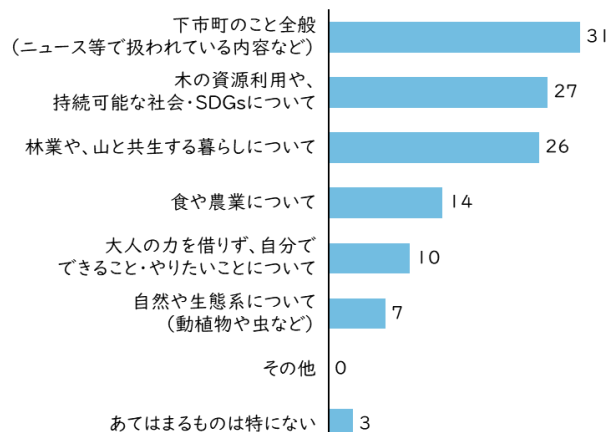
### 学校からの案内のほかに調べたこと



Q5 お申込みから参加に至るまで、案内は十分でしたか。

Q7 本プログラムに参加する前に、案内以外で、調べたことはありますか。すべてお選びください。

### 参加後に、関心が高まったこと



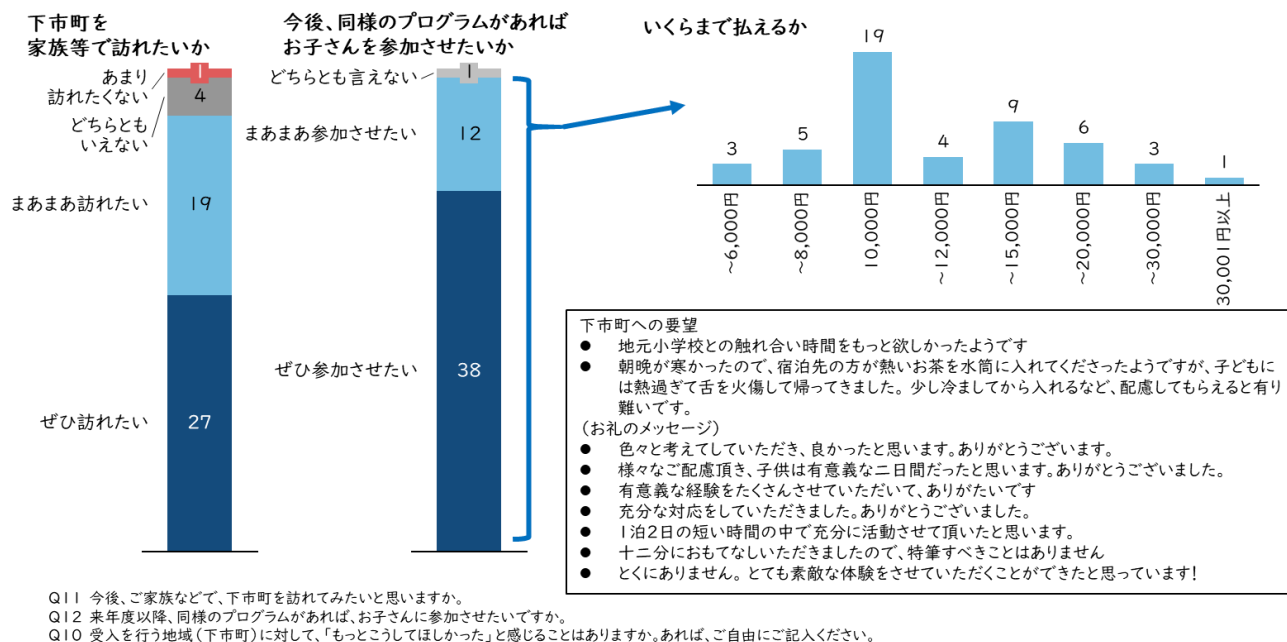
Q7 プログラムに参加する前と後を比べて、お子さんの関心が高くなったことはありますか。あてはまるものをすべてお選びください。

参加後に関心が高まったことは、「下市町のこと全般」が最も多く、「ニュースで下市町の話が出ると家族の会話のきっかけになる」といった感想も聞かれた。下市町に家族等で訪れたいという割合も高く、子どもの来訪をきっかけに関心が高まったり、家族で訪れるきっかけになったりと、関係人口につながっていることも確認できた。

自由記述で「子どもの話で印象に残っていること」を聞いたところ、「自分で加工した割り箸を紹介してくれた」「下市町で体験したことを話してくれた」など、プログラムの内容が印象に残り、保護者との会話などを通してさらに記憶の定着につながっていることが確認できた。

プログラムに「いくらまで払えるか」は、1万円が最も多く、1万円以上の回答も多く、事前事後学習を行うことで価値を感じて頂けることが示唆された。

図 17 奈良女子大学附属小学校アンケート(2/2)



#### ◆自由記述より:お子さんの話で印象に残っていること ※抜粋

体験を通して、林業・仕事全般に対する意識の変化や、下市町・奈良県に対する関心の高まり、食に関する気づき、自立心・主体性などが育まれた様子が見える。

(以下、回答から引用)

- 林業体験を通して、チェーンソーで木を切ったところの様子などを見て「林業をやっている人は命がけでされていて、木を切ってくれている人に感謝しないといけないなあと思った」と話していました。
- 泊まった所でお世話になった方がユニークだった。箸を作ったり、カンナで削る作業がとても楽しかった。それぞれの宿舎での情報交換が楽しかった。下市にまた行きたいと思ったと良い印象であった。
- 澄んだ空気と自然の偉大さが下市の良さだと言っていました。無駄に開発せず、今の下市の自然を後世にも伝えて欲しいと言っていました。そして、廃校の有効利用についてはとても興味深かったようで、事前・事後にもよく調べていました。林業体験・柿の葉寿司作りをはじめ沢山の貴重な体験・経験をさせていただき、ありがとうございました。
- 林業や木の資源利用についての関心を高めることができたようです。木を植える→育てる→使うの循環が大

切で、木を使うことが林業を守ることに繋がることもわかりました。

- 参加前は、宿泊施設の食べ物に不安を抱いていたが、実際に頂いて美味しさを感じて、食べられる物が増えました。
- 前に増して奈良の過疎化、奈良の発信の弱さにどうしたらいいか考えるようになりました。
- 以前にも増して、何事にも積極的に取り組むようになったと感じている
- 家族から離れて宿泊、学習出来た事に自信がついた様で、下市を同じ奈良県の地域として身近に感じている。

## ⑤ 今後の方向性

今回の取組は、奈良国立大学機構との連携事業の一つであり、本取組を継続するだけでなく、大学・附属小学校との連携を強化していくとともに、今回得られた受入ノウハウを活かして他の団体の受入にも取り組むなど、様々な広がりが見えてくる。そうした広がりを考える上での課題と、対応の方向性として、以下の通り整理している。

### <課題>

- 持続的な運営体制
  - 下市町関係者の献身的なサポートがあって受入がスムーズにできた側面があり、回数を重ねる上で特定の方に負担が集中しない仕組みが求められる。
  - 交流推進支援事業による支援がない場合に、受入に係るコストが賄える仕組みが必要。
- 地元の子どもの交流
  - 下市あきつ学園の子どもにとっても有意義な交流となるよう、交流の場作りが求められる。
  - また、大学・大学附属小学校との連携が深まり、普段の教育活動でも連携することが期待されている。
- アレルギー対応や、特別なニーズをもつ子どもへの対応
  - 町内でアレルギー対応ができる飲食店・弁当屋が少なく、安心安全の確保は今後の課題となる。
  - 特別なニーズを持つ子どもの情報について、学校と事前に共有しておくことが望ましい。

### <課題に対する対応の方向性>

- 受入コーディネート機能の強化
  - 持続的な運営体制を構築する手法として、連携省庁の支援施策を活用しながら取り組むことが効果的と考えられる（例：農林水産省「農泊推進事業」）。
  - 旅行業の資格を取得し、手配に係る手数料を収受できる仕組みを構築することも考えられる。
- 本プログラムを契機とした、様々な交流プログラムへの拡大（特に探究学習の受入など）
  - 宿泊を伴う体験活動に限らず、奈良国立大学機構の附属小学校の校外学習で下市町を訪問したり、下市町関係者が往訪して地域の魅力や課題に関する授業を行ったりと、普段の教育活動でも連携できる可能性が様々考えられる。
  - 下市あきつ学園では、奈良国立大学機構の学生による学習支援を受け入れており、大学との連携強化により、ゼミやフィールドワーク等で下市町を訪れる大学生の増加なども期待できる。
- 奈良女子大の学生との連携による受入体制の強化&実習の機会提供
  - 今回の交流推進支援事業では、大学生が受入のスタッフを務め、十分に活躍された。教育を学ぶ学生

にとっては、子どもと接する機会となり、学生自身にとっても学びにつながる。こうした交流の機会に、学生も関わってもらうことで、双方にメリットのある取組ができる可能性がある。

- 大人向けの体験プログラム等へ広げていく可能性
  - 下市町では、農業に関心のある方を対象にした農業教室や料理教室などを提供している方もおり、大人版の農山漁村体験の実績がある。
  - 今回の取組を通して、分宿による数十名規模の受入や、歴史・産業等を学ぶプログラムの実証ができたため、新たなプログラムにノウハウを活かすことも考えられる。
- 教育の専門家との連携により、子どもの受入体制の不安を取り除く
  - アレルギー対応や特別なニーズのある子どもへの対応などに際して、教育学を専門とする大学の教職員にアドバイスを頂くことで、受入側・送り側双方の不安を払拭することが考えられる。

### (3) 神奈川県・群馬県中之条町における取組

#### ① 事業の背景・目的

##### <神奈川県の背景>

神奈川県では首都圏に近い立地を活かした都市農業が特徴で、卒業後の就農を目指す生徒も一定数いる。一方で、農家数の減少により、就農やインターンシップの受入ができる農家の確保が課題となっている。

神奈川県の高等学校では、「かながわ県版デュアルシステム」として、学校での学びと校外での現場実習を組み合わせた専門教育を行っているが、農業科においては、インターンシップ等の受入ができる農家が限られており、就農を希望する生徒とのマッチングが課題となっている。

また、都市農業だけでなく、畜産や、大規模農業など、様々な農業の形態を体験するには、県外の農家で実習することも有意義である。

このような状況から、デュアルシステムを補完する農業体験の機会を提供し、農業の担い手の育成につなげるために、本事業に取り組んだ。

##### <中之条町の背景>

中之条町では野菜、果樹、花き、畜産など様々な作物を生産しているが、農家の高齢化が課題となっており、新規就農者の確保・育成が求められている。本事業を通して、参加した生徒に継続的に関わってもらうだけでなく、新規就農者の実習を受け入れる体制を構築することで、選ばれる就農先を目指している。

##### <本事業の目的>

このような背景から、両地域にとって「次世代の農業の担い手獲得のためのシステム構築」が課題であり、高等学校の農業科の生徒が、就農も意識した本格的な農業インターンシップを行う機会を、双方の地域が連携して構築した。

中之条町と神奈川県のマッチングに際しては、総務省地域力創造アドバイザーの塚田佳満氏の紹介があり、令和4年度には東京都と中之条町による交流推進支援事業に取り組んだところである。都立高等学校のインターンシップは今年度も継続して行われている。

表 12 本事業の送り側・受入側それぞれにとっての目的

| 【送り側】神奈川県にとっての目的                                                                                                                           | 【受入側】中之条町にとっての目的                                                                                                                                     |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>● インターンシップを通して、新規就農を目指す高校生が研修を受けられる環境を整える</li><li>● 受入体制を充実させることで、県内諸高等学校を卒業後に就農を希望する方を増やす</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>● 将来的に中之条町にて就農する人材を増やすためのきっかけを作る</li><li>● 地域農家の次世代の人材育成に対する機運を高める</li><li>● 地元高校生と地域外の高校生の交流機会を創出する</li></ul> |

## ② 実施した内容

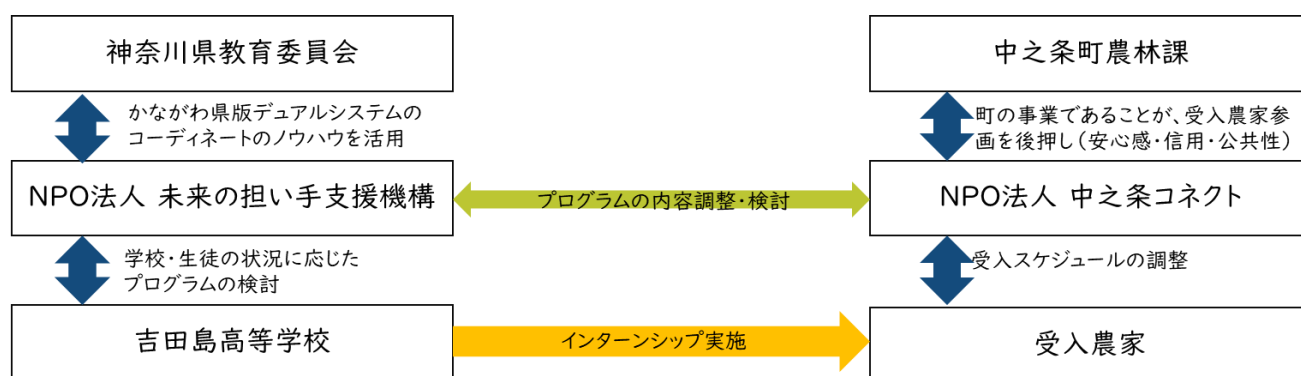
### <受入側・送り側の連携>

受入側では、インターンシップを受け入れる農家の選定・調整や、緊急時の対応の確認等を行った。

農業を学ぶだけでなく、送り側にとっては就農後の暮らしをイメージできる機会や他地域の方と交流する機会の確保として、受入側にとっては中之条町への関係人口を育成する手段として、アウトドアや祭りなどの要素も取り入れた。

送り側では、NPO 法人未来の担い手支援機構から県内の農業科を持つ学校へ案内を行うなどして参加者の募集に取り組んだほか、生徒の状況を踏まえてプログラムの柔軟な調整に取り組んだ。

図 18 神奈川県と群馬県中之条町の連携体制



### <プログラムの検討>

プログラムは、野菜・花き・酪農と様々な種類の農作業を体験できるものとして、日々の気象状況や作業状況をみながら中之条コネクトが柔軟に行程を入れ替えるなどの対応を行っていた。生徒の要望も聞きながら、なるべく様々な体験ができるように検討した。

また、農家の作業時間帯とインターンシップの時間帯が異なり、農家による送迎が難しい状況をふまえて、中之条コネクトが送迎まで実施した。こうした細かな配慮により、農家においては受入に伴う人的・時間的なコストを削減でき、持続的な受入体制の構築に寄与している。

<当日の様子>

表 13 農業インターンシップの行程(写真提供:NPO 法人 中之条コネクト)

| 8月1日(火)                                                                                                                      | 8月2日(水)                                                                                                                    | 8月3日(木)                                                                                                                    | 8月4日(金)                                                                                                                    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 12:00 中之条駅到着<br>13:00 ガイダンス<br>14:30 受入農家挨拶<br>16:30 四万温泉見学<br>18:00 買い出し<br>20:00 夕食<br>22:00 就寝                            | <b>A牧場【酪農】</b><br>6:00~10:00<br>16:00~20:00<br><b>B農園【花き】</b><br>9:00~12:00<br>14:00~18:00<br><b>C農園【野菜】</b><br>5:00~11:00 | <b>A牧場【酪農】</b><br>6:00~10:00<br>16:00~20:00<br><b>B農園【花き】</b><br>9:00~12:00<br>14:00~18:00<br><b>C農園【野菜】</b><br>5:00~11:00 | 吾妻中央高校との交流会<br>9:00~12:00<br><b>D農園【野菜】</b><br>5:00~8:00<br><b>A牧場【酪農】</b><br>16:00~20:00<br><b>B農園【花き】</b><br>14:00~18:00 |
|  <p>町長からの激励</p>                             |  <p>A牧場でのインターン</p>                        |  <p>花の集荷場の見学</p>                         |  <p>吾妻中央高校との交流</p>                      |
| 8月5日(土)                                                                                                                      | 8月6日(日)                                                                                                                    | 8月7日(月)                                                                                                                    | 8月8日(火)                                                                                                                    |
| <b>D農園(販売会)</b><br>9:00~16:00<br><b>A牧場【酪農】</b><br>6:00~10:00<br>16:00~20:00<br><b>E農園【リンゴ】</b><br>9:00~12:00<br>14:00~18:00 | <b>D農園【野菜】</b><br>5:00~8:00<br><b>E農園【リンゴ】</b><br>9:00~12:00<br>14:00~18:00<br><b>C農園(販売)</b><br>9:00~17:00                | <b>◆地域体験</b><br>カヌー体験<br>9:00~12:00<br><b>F園芸(バラの蒸留体験)</b><br>15:00~17:00<br><b>BBQ・花火</b><br>17:00~20:00                  | <b>宿舍掃除</b><br>8:00~12:00<br><b>解散式</b><br>11:00~12:00<br><b>中之条駅出発</b><br>13:30                                           |
|  <p>とうもろこしの販売会</p>                        |  <p>とうもろこしの収穫</p>                       |  <p>食香バラの蒸留体験</p>                      |  <p>トラクターの体験</p>                      |

### ③ 事前ヒアリングの結果・課題

インターンシップ実施前にオンラインで送り側・受入側双方の関係者と総務省を交えて、昨年度からの改善点や、本事業の目的、課題等について聞き取りを行った。

#### <前年度からの主な改善点>

- ・ 宿泊場所が、町場の空き家を活用した施設になり、快適性が増すとともに地域との交流がしやすくなった。
- ・ 女性の農家が今年度参画してくれて、女子生徒にとってロールモデルになりやすくなった。
- ・ 東京都と神奈川県のインターンシップを同時開催し、生徒間の交流が促進されている（前年度はコロナの影響で東京都のみの実施だった）。

#### <課題・検討事項>

- ・ かながわ県版デュアルシステムでは、県内の実習に単位が認定される仕組みとなっている。なお、学校長が認めることで単位が認定される場合もあるため、学校長への説明が重要。
- ・ 次年度以降の運営資金の確保。送り側・受入側双方で確保したく、良い支援施策を探している。

また、8月3日に中之条町を訪問して、インターンシップの様子などを視察し、送り側・受入側関係者と意見交換を行った。

写真：NPO 法人中之条コネクトの拠点・宿泊場所／花き農家で農作業を行っている様子



#### ④ 事後調査の結果・課題

プログラムの結果をふまえて、今後継続させるための良かった点や改善点等を分析するため、送り側・受入側それぞれでヒアリングを行った。

#### 中之条町ヒアリング

##### <実施概要>

- 時期：2023 年 10 月 16 日
- 手法：オンライン
- 担当者：中之条町農林課様、NPO 法人中之条コネクト様

##### <昨年度と異なる点、当日苦勞したことなど>

- 体調不良で 1 名欠席になり、農家の受入が変わってしまった。
  - 農家 5 軒に対して、2 人 1 組（神奈川 4 名+東京都 2 名）→ずっと 1 人で動くわけにはいかないので組み直す必要が発生した。農家への事前の連絡がギリギリになってしまった
    - ◇ 特に、今年から受け入れをする農家とのコミュニケーションが不安だった
- 宿舎の利便性が向上した。昨年度は郊外の寮として使われていた施設だったが、今年度は町の中心部にあ  
る空き家を改装した施設で、快適性と地元住民との交流を両立で来た。
  - 使い勝手がわかっている施設で、農家さんも寄ってくれる、地域の住民も理解してくれる
- 今年度は病院に行くこともなかった（風邪をひいた生徒もいたが、コロナではないことが来訪前にわかった  
ので特別対応は必要なかった）
- 日程を短くした（2 週間→8 日間）のは間延びしなくてよかった（やや物足りないが、学びは実現できた）  
→足りなかった体験を洗い出し、日数を追加するかどうか検討したい。
  - 野菜・果樹・花き・酪農と活動の幅が広がった
  - 農家どうしの付き合いが長く、入れ替えの対応がスムーズにできた。生徒の体調も考慮しながら無理を  
しないスケジュールが組めた
  - 猛暑だったので半日休みを確保するなど、農家にとっても柔軟に動けた。  
※特に暑い時間帯では、農家さんも休みが必要

##### <送り側との連携について>

- 学校側の準備—昨年度は行事と重なったので公欠扱いにしてもらえた。
- 高校と直接やり取りするなど、送り側との密なコミュニケーションが取れると良い。
- 神奈川県なら県内で農業を体験できると思うが、中之条町で取り組む意義や期待することを確認したい

##### <継続に向けた課題>

- 過去にインターンシップで訪れた生徒同士のつながりを作る。神奈川県からの受入は初めてだったので、参  
加者同士のつながりはこれから作っていきたい。
  - 10 月に行った「りんご祭り」を案内したところ、東京都からインターンシップに参加した生徒が来てくれた
  - 今年度参加した 5 名はお互いに仲良くしており、一緒に中之条に行きたいと話している

- 担当の先生が中之条のことを気にかけてくれている。東京のコーディネーターも動いてくれているので、次年度の引き継ぎ・子どもへのアプローチはできそう
- 事業費を確保したい。
  - ふるさと納税や森林環境税などが考えられる。他の支援メニューは、本事業に活用しづらいと感じる。
  - 民間団体(中之条コネクト)が主体となっているため、補助金の活用は前向きに考えたい。

## 神奈川県ヒアリング

### <実施概要>

- 時期:2023 年 10 月 17 日
- 会場:神奈川県立吉田島高等学校
- 担当者:神奈川県教育委員会様、吉田島高校様、NPO 法人未来の担い手支援機構様、  
地域力創造アドバイザー 塚田佳満様

### <農業インターンに期待すること・進路との関わり>

- 企業は社会貢献活動として、労力をかけてインターン生の受入を行ってくれる。一方で農家は、手間・負担をかけて受け入れるのが難しい。インターンの受入には経営体力が必要
- 一方で、学校で農業を教える立場としては、就農を目指す生徒のためにデュアルシステムは是非とも取り入れたい。学校だけでは学べない、土づくりから収穫までの一連の流れを体験してほしい。たとえばいちご農家では、夏休みの体験だけだと栽培にふれられない。これまでも吉田島高校では5日間の農業体験を実施してきたが、生産の全工程を見られない。
- 今回のプログラムでは、様々な農家の体験をすることで、1 週間の間に様々な経験ができたのはよかった。朝から晩まで、農家の仕事(暮らし)の流れを体感できたのではないか。
- 就農者の確保は全国的な課題となっている。育成には国の制度があるが、マッチング部分でインターンが役立つと思う。時間や労力をかけて指導でき、適切な待遇で受入をできる農家は非常に限られており、進路指導をする上でも、生産者(生産法人)の見極めに苦労している。

### Q. 体験とインターンでは、どのような違いがあるか。

- 体験を通して何を学べるかまで考えて、受け入れをしてくれる農家は非常に限られている。県農協と連携して様々な受入先に分散させて体験を行っているが、正直なところ当たりはずれがある。たとえば、繁忙期の作業をただ生徒に手伝わせるだけでなく、意義や前後の行程、完成形の様子などを少し説明するだけでも効果は大きく変わるはずだが、そういった指導ができるかたは一部に限られる。
- 受入先の見極めを行う上で、中間組織が不可欠。市町村単位で行うイメージで、中之条町ではコーディネーターを雇用する経営体力がある点も評価している。
  - 県内では、家族経営(+アルバイト)が多く、自分が就農するイメージが持てない。専業農家として生計が成り立つことを理想としている(特に、相続した農地をもたない新規就農者として)。
- 先進農家で体験し、研修を受けてから就農するプログラムもあるが、社会人向けになっており、高校生が卒業後すぐに就農する道筋がない。社会人経験を通して経営ノウハウなどを身につけることが当たり前になっているが、イチから教える仕組みがないことが課題。

- 進路として、県内での就農にはこだわっていない。ちゃんと仕事として成り立つところに就農できるよう、進路教育で丁寧に説明している。農業を志しても、季節労働者として不安定な雇用環境におかれ、安定した生活（独立した生計）をできなくなる人もいる。
  - 県内では畜産の研修センターがなく、畜産に就きたい人は他県で研修を受ける必要がある。

#### <事前・事後学習について>

- 1度の体験に限らず、将来につなげる側面があると良い。たとえば、冬も体験したり、3連休などで通える仕組みがあると良い。今回は、10月に行われた「りんご祭り」に参加してもらい、中之条コネクと連携してりんごパイの販売体験を用意した（※吉田島高校の生徒は体調不良のため参加できず）。祭りを通してインターン生の活動を紹介できる機会になった。
  - 瑞穂農業高校では、高校の行事とバッティングしてしまったが生徒がどうしても「りんご祭り」に参加したいということで、高校で加工した七味唐辛子を中之条で販売することで公欠扱いにしてもらった。七味は都内で販売した時以上に好評ですぐに売り切れ、課題研究（※教科）の発表機会になった。
- 行く前には着眼点を学んでもらっている。農家の暮らしがどんなものか、仕事の全体像を座学で理解する。そして現地に出かけて、ローカリズムの楽しさに浸ってもらいたい。コミュニティに溶け込む経験ができると、地方での暮らしを楽しめるのではないか。
  - 今回のプログラムでは、カヌー体験や地元の夏祭りに参加するなど、遊びの要素があったのもよかった。高校を卒業して新規就農する生徒は移住者なので、地元農家がやらないことでも、楽しいことにも挑戦していく方が良い。
- 事後の発表は、写真+文章で簡潔にまとめてもらう。体験を通して想像されるキャリアステップなど、項目を指定して書いてもらう。分量は多くなくてよい。夏休み後に、異なる体験をした様子を生徒どうして共有することで、平塚農業高校（※担当者の前任校）では、15地域に派遣した。
  - 「新・農業人フェア」など、複数の学校で集まって交流できると良い。
- 単位認定を行うには、日誌と事業所側の書類、事前事後のレポートの3点があればよい。始めるにあたっては、何を何時間するなど、カリキュラムとして整理しておくと判断しやすい。
  - ただし、高校3年間のカリキュラムは事前に編成しているため、すぐに単位認定することは難しい。事前の調整が必要。
  - インターンは3年間どこでも体験できる。デュアル教育は教科教育と紐づいており、毎週定期的に的に通うことが想定されるため、新しく取り組むのがむずかしい。
  - ただし、平塚農業高校では、単位認定しなくても多くの生徒が積極的に参加した。
- これからの時代、学校で完結する教育は成り立たなくなる。地域と一緒に取り組む必要があり、外部の方に学ぶことが多い。
  - たとえば、家庭科（生活科学科）に関連して、プロの料理人を招いて授業を行っている。新指導要領で目指している「社会に開かれた教育課程」を実践している。
  - 専門科目の教員が不足しているのは課題。
- 学校の農業科目では農業経営の学習が中心となる。栽培技術などは、社会に出て実際の農家に学んだ方が良い。学校で学んだ生徒が、活躍できる仕組みが必要。
  - 学校から社会への接続として、地域おこし協力隊インターン制度、青年就農支援、ふるさとワーキングホ

リレーのような仕組みが使えないか。

- 「人」にふれる経験が必要。

Q.今後の生徒たちに必要な支援は。

- 学校卒業後に就農する生徒は、家探しが大変。初期費用を支払えない、保証人を用意できないなど。食事つきの寮があれば、農業を志す仲間ができるのではないかな。
  - 近年、廃校や空き家などを活用したシェアハウスが増えている。そうした取組と就農が掛け合わせられると良い。
- 地方に移住して就農する際には、①ファーストステップ（地域に溶け込むこと）、②チューター（随時相談・指導してくれる人）、③キャリアが見えるサポートの 3 つが必要。デュアルシステムでは、学校にしながら農業体験ができるので、社会に出た姿を描いて、モチベーションにつながる。
  - 地方部だけでなく、県内で就農してもらうのも高校の役割として重要だが、県内では農業について教育・受入ができる機関が不足している
  - 地域として人を育てる仕組みが必要。過疎対策系の事業を活用すれば構築できるか。

Q.今回の交流推進支援事業について、追加であるといふ支援はあるか。

- 条件不利な子どもにとって、支援事業費を活用して参加費を格安にしても、その金額の負担すら難しい現状がある。
  - そうした子どもにとって、1 回を諦めてしまうと損失が大きく、体験格差が生じている。
  - 地方に出れば活躍できる子どもはたくさんいるので、機会を作り出すのが大事。
- 今回はソフトな入り方が良かった。楽しみをつくるのも大事で、町の魅力を知ることがモチベーションにもつながる。また、条件不利な子どもにとっては、貴重な旅行の機会にもなる。
  - プログラムの作成にあたっては、未来の担い手支援機構の農業高校出身スタッフが、自分の経験に基づいて無理のない範囲・学校では体験できない内容で考えてくれた。
  - さらに、当日の様子を見て、疲れがたまっているようだったら休ませたり、ある分野に関心を持ったらその作業を多めにしたりと、臨機応変に対応してくれた。
  - こうしたコーディネーターの役割は、教師自らがやろうとすると非常に負担がかかるので、未来の担い手支援機構・中之条コネクに支援いただいて非常に助かった。来年度以降も是非ともお願いしたいが、モデル事業がない中で送り手側・受入側ともに財源の確保が課題となる。

## ⑤ 今後の方向性

事前・事後のヒアリングから、課題と対応の方向性を、以下の通り整理した。

### ● インターンシップの前後の交流の場の確保

今後、中之条町農業インターンシップに参加経験のある生徒が増えていくことで、学年間のつながりが生まれていくと考えられる。インターンシップ経験者のグループを通して関係人口につなげていくとともに、彼らが次の学年にインターンシップや中之条町のことを紹介するなど、取組を広げていくことが期待される。

- インターンシップの参加者募集にあたり、前年度の参加者が経験したこと・学んだこと等を発表する機会を設ける
- 事後学習の一環として、インターンシップで学んだことを発表する機会を設ける
- インターンシップに参加した生徒が、中之条町で行われるイベントに参加するなど、中之条町との関係を継続させる機会を広げる

### ● 事業費の確保

- 各種支援メニューや、ふるさと納税、森林環境税等を活用しながら、コーディネーターの活動が継続して行える体制を作る

### ● (受入側) 大人向けの就農支援プログラム等への波及可能性を検討

- 生徒の受入ノウハウを活かして、就農を考える大人を受け入れるプログラムの造成を検討する。観光要素の強い農業体験と、農業大学校との中間の位置づけとして、農家の暮らしがどのようなものかを理解し、先輩農家と対話する機会を設けるなど、農業に関心のある方に訴求するプログラムを提案する。

### ● (送り側) 希望者による体験プログラムとして、参加者を増やしていきたい

- 農業に関心のある生徒を広く集めることで、プログラムへの参加者を増やし、将来的な県内での就農の実現につなげていく。

※県外の実習がデュアルシステムの単位に認定されないという状況については、多くの授業や実習を履修している生徒にとっては大きな問題にはならない可能性もある。希望制のプログラムを実施することで農業に関心の高い生徒が、本物の農業にふれる機会を提供できる可能性がある。

#### (4) 報告会の実施概要

##### ① 開催の目的・内容

子供の農山漁村交流推進支援事業の成果を広く共有し、都市部と農山漁村地域の連携を促進するために、「子供農山漁村交流推進支援事業 報告会」を実施した。

|      |                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                         |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日時   | 令和 6 年 2 月 21 日 (水) 14:30~16:00                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                         |
| 開催方法 | オンライン(東京都千代田区の会場より配信)                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                         |
| 発表者  | <奈良県下市町> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 下市町地域づくり推進課</li> <li>・ 下市町賑わい創出協議会</li> <li>・ 奈良女子大学下市アクティビティセンター</li> <li>・ 奈良女子大学</li> </ul> | <神奈川県> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 神奈川県教育委員会</li> <li>・ 神奈川県立吉田島高等学校</li> <li>・ NPO 法人未来の担い手支援機構</li> </ul> <群馬県中之条町> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中之条町農林課</li> <li>・ NPO 法人中之条コネクト</li> </ul> |
| 有識者  | 早稲田大学名誉教授 宮口侗弼先生                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                         |
| 参加者  | 当日視聴:23 名／アーカイブ配信を実施                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                         |

図 19 子供農山漁村交流推進支援事業報告会のちらし

## 子ども農山漁村交流プロジェクト

# 子供農山漁村交流推進支援事業(モデル事業)

# 報告会

日時

2024. 2.21 (水) 14:30～16:00

開催方法

オンライン (Zoom Webinars)

参加対象

- 子どもの農山漁村体験交流推進支援事業(モデル事業)にご関心のある方
- 子どもの農山漁村体験に関わっている方・ご関心のある方

お申込み

Webフォームからお申し込みください

<https://questant.jp/q/kopro2402>



参加無料

申込〆切日

2/19(月)

発表者

下記2組の地域による取組を発表します。

包括連携先の大学と協力し、  
附属小学校児童の林業体験を実現

農業高校生徒の農業インターンシップを  
両側のコーディネーターと協働して実現

送り側  
国立大学法人  
**奈良国立大学機構**

受入側  
**奈良県下市町**

送り側  
**神奈川県**

受入側  
**群馬県中之条町**

\* 包括連携協定を結ぶ奈良県下市町として実施

|                |      |              |
|----------------|------|--------------|
| 学校教育／社会教育      | 位置づけ | 学校教育         |
| 小学生(クラス単位／希望者) | 参加者  | 農業科の高校生(希望者) |
| 1泊2日           | 日数   | 1週間          |
| 林業(伐採・加工)・郷土食  | 体験内容 | 農業(野菜・花き・畜産) |

**#SDGs学習**    **#探究学習**    **#異学年交流**

- 「「木の資源をすべて活用!」SDGsを学ぶ さとやま体験in下市町」と題して、林業体験・割り箸加工体験・柿の葉寿司作り体験等を行い、産業や自然、食について学びました。
- 大学と町の連携を担うコーディネーターが送り側・受入側の調整を行い、スムーズな受入ができました。
- 町職員による事前学習等を行い、林業や地域に対する関心が高まったとの声が聞かれています。

**#デュアル教育**    **#インターンシップ**    **#専門教育**

- 自身のキャリアとして農業をとらえるきっかけとして、1週間様々な種類の農業・畜産を体験しました。
- 受入側ではコーディネーターが受入農家との連携を密に行い、生徒の体調や天候に応じた作業を柔軟に実施し、スムーズな受入を実現しました。
- 後日行われた中之条町のイベントに、インターンシップに参加した生徒も参加するなど、継続的な交流につながっています。

お問合せ

株式会社JTB総合研究所

主催: 総務省 地域力創造グループ 人材力活性化・連携交流室

## ② 報告会の内容(要約)

### 奈良県下市町・国立大学法人奈良国立大学機構

#### ◆下市町の概要

(下市町地域づくり推進課)

- 下市町は奈良県中部に位置する町で、面積の8割を森林が占め、木工業・林業が栄えている。今回のプログラムでは、町内唯一の学校である下市あきつ学園との連携も図った。
- 下市町と連携して受け入れを行った「下市町賑わい創出協議会」では、5人のコーディネーターが、町・地域の事業所・町商工会・地域の団体と連携して町の活性化を図っている。

#### ◆国立大学法人 奈良国立大学機構の概要

奈良女子大学 寺岡教授

- 2023年に奈良県にある2つの国立大学が法人として統合し、両大学の国際連携や産学連携を進めるために、奈良カレッジズ連携推進センターを作り、両大学の教職員が関わっている。
- 私がリーダーを務める地域連携部門では、属人的になりやすい地域との連携を作り、地域課題を起点とした研究に大学も関われるような新たな仕組みを図り「奈良型エクステンション制度」を構築した。
- 奈良型エクステンション制度は、大学と社会の連携を深めるプラットフォーム。連携先の町村にアクティビティセンターを設置し、地元で活躍する方を大学・自治体が特任助教に選定し、大学と地域を結びつける役割を果たして頂いている。この仕組みがあったことで、下市町から本事業の提案があり、付属小学校2校からの送り出しが実現した。
- 下市アクティビティセンターでは、夏休みの子どもの学習支援や、出張美術館の開催支援や、大学生のガイドツアー造成などにも取り組んでいる。

#### ◆連携のきっかけ・目的

(下市町地域づくり推進課)

- 附属小学校の受入は初めてだったが、大学との連携はこれまでも行ってきたため、積極的に連携が図れた。加えて、下市町賑わい創出協議会が設立され、より新しい事業に取り組める環境が整った。
- 送り側では、役場・事業所において受入ノウハウを身に着けること、大学との信頼関係を構築し連携体制を強化すること、地域の良さを知ってもらい関係人口につなげることの3つを目指した。受入側では、住んでいる地域の文化を知ること、多様な世代の人と関わること、林業体験をして木について学ぶことの3つを目指した。

#### ◆受入の準備・調整

(下市町地域づくり推進課)

- 準備等を行う体制として、奈良女子大学下市アクティビティセンター特任助教、下市町地域づくり推進課、下市町賑わい創出協議会の3者が連携した。
- 体験内容としては、下市町の伝統文化を学べるプログラムとした。割り箸発祥の地や、柿の葉寿司の店、また日本最古の寿司屋など、下市町ならではの文化にふれられるものとした。また、林業体験については、森に入って木を切る体験、材木を加工する体験、割り箸等に加工する体験と一連の流れに沿って体験してもらうことで木について理解してもらえる構成とし、既にある下市町の魅力を体験してもらうことを意識した。
- 宿泊先として、町内の3つのゲストハウスで分宿したことで、それぞれで体験した内容を共有し合うことなども期待した。
- まず事業所・ゲストハウスに対しては、事業の内容を説明して協力を得て、当日の流れを細かく調整した。

小学校に対しては、教師の下見対応や、児童のアレルギー確認など、安心していただくために細かくやり取りを行った。多世代との交流のためにも、奈良女子大学の学生に受入を手伝ってもらい、事前研修等を行った。当日スムーズに動けるよう、当日の対応に関する事前打合せも行った。その他、保険加入や他部署の職員への応援要請なども行ってきた。

- 事前学習では、参加型のプログラムでは資料を提供して各自読んで来てもらう構成とし、授業型のプログラムでは直接学校を訪れ、事前学習を行った。下市町の紹介と、木の資源の活用事例を紹介した。

## ◆当日の様子

(下市町地域づくり推進課)

- まず、伐採から加工まで木にふれる体験では、まず山に入り、講師が伐採した木を子どもたちがのこぎりで切った。次に、製材所で丸太の皮むきや丸太を半分に割る様子を見学した。最後にかんな削りによる割り箸の加工場を見学した。割り箸は端材を無駄なく活かすものであり、SDGsの学習にもつながったと考えている。
- 文化体験として、柿の葉づくり体験や、日本最古の寿司店で歴史を聞く体験、朝食に郷土料理の茶粥と町内で作られている漬物を食べる体験などを行った。ゲストハウスでもそれぞれ体験を行い、あるゲストハウスでは薪を割って五右衛門風呂を沸かした。なお、開催期間にはアートイベントが行われており、それにも参加できる行程とした。

※投影資料の抜粋(下市町提供)

### 合宿の様子①

#### ■伐採から加工まで木に触れる体験



### 合宿の様子②

#### ■伝統文化を学ぶ体験



▶ 普段買って食べている柿の葉寿司を自分たちで手作りする体験をした

▶ 創業800年以上の寿司屋「つるべすし 弥助」50代目から、その歴史を教わった

▶ 3杯ほどお代わりしている児童もおり郷土料理をいただき学ぶ経験となった

## ◆参加者の声

(下市町賑わい創出協議会)

- 参加した児童の声として、「下市町には様々な魅力があるのでもっと知ってもらうための行動が大切ではないか」「林業の大切さや大変さを学んだ」というだけでなく、林業の仕事に関心を持った子どもも数名いた。保護者の声として、家族で下市町を訪れてみたいといった意見があり、本取組が関係人口につながったと考えている。先生方においては、実際に現場に出て職人さんの仕事をみて話を聞いたことや、町議会の見学ができたことも評価頂いた。色々な体験ができた点が良かったのではないかな。
- 成果として、自由参加型と授業型の2パターンを経験できたことが受入ノウハウにつながった。下市あきつ学園の児童、奈良国立大学機構、大学生など様々な関係者と関わったことも成果であった。
- 活動を継続するための財源の確保や、分宿による教師の負担増、費用負担などが課題。
- 費用負担については、下市町賑わい創出協議会が令和6年度の開業に向けて準備を進めているゲストハウスの活用によって、宿泊費を抑えられると考えている。また、貸切バスの利用距離を短縮して参加者からの徴収額を抑えるために、近くまで電車で来てもらうことも考えられる。

- 今後の展望として、学校のニーズを取り入れた合宿プログラムの設計に向けて、体験プログラムのブラッシュアップによって、満足度や境域的な効果を高めていきたい。また、下市町唯一の学校である下市あきつ学園の子どもたちが、附属小学校等様々な子どもたちと関われる機会を確保すること、そしてアレルギー対応など安心・安全に取り組んでいきたい。今回交流を行った奈良国立大学機構の附属小学校に限らず、多くの学校からの受入に取り組んでいきたい。

Q. 事前に学校の先生に下見をしてもらった際に、受入側では想定していなかった課題が出てきたか。

A. (下市町賑わい創出協議会) アレルギー対応が課題となった。町内でアレルギー対応の食事を提供できる施設は限られており、その事業者との連携は今後の課題となる。

Q. 大学生の活躍はどのようなものだったか。

A. (奈良女子大学下市アクティビティセンター) 子どもと大人の間で、お姉さんとして気軽に話せる存在であった一方で、子どもとの接し方を実地で学ぶ機会が提供できたのではないかと考えている。今回参加してもらった学生には、今後も関わってもらいたい。

Q. 学生スタッフの活用にあたり、事前に調整すべきことはあるか。

A. (同) 学生スタッフはみな優秀で、事前に説明した通りに動いてくれた。一方で、学生にとっては下市町を知ってもらう機会としても位置付けていたので、もっと下市町を楽しんでもらう機会を提供できればよかった。バランスを取って対応できればよかったと思うが、全体的に問題がなくなってきた。事前の打ち合わせがしっかりできていたのがよかったと考えている。

➡(司会) 学生だけでなく、受入に関わる方や、学校など多くの関係者とコミュニケーションを進めていたのがうまくいったポイントだと感じた。

Q. 受入を行う前まで、不安に感じた点もあったのでは。不安が解消されたきっかけなどがあれば併せて教えてほしい。

A. (下市町賑わい創出協議会) 初めての取組だったので、アレルギーをはじめ安全への意識は特に高く持っていた。学校の先生方や事業者は基本的に協力的だったおかげで、安心して取り組むことができた。

Q. 林業・木工体験の他に、学校での学びと関連付けられる学びのコンテンツはあるか。

A. (同) 全国シェア9割を誇る三宝(神具)や陶芸、移住者が取り組む様々なプロジェクトなど、体験できるものは様々あったが、SDGsなど今回の実施目的に応じて内容を検討した。

## 神奈川県・群馬県中之条町

### 1. 受入側地域の概要

(中之条町農林課)

- 神奈川県立高校の農業科の生徒を対象に、中之条町の野菜・花き・園芸等の農家でのインターンシップを体験してもらった。
- 実施にあたっては、送り側・受入側双方で NPO 法人のコーディネーターと連携し、柔軟にプログラムの実施ができた。
- 中之条町は群馬県北西部に位置し、新潟県・長野県とも接している。標高が高く朝晩の寒暖差が大きく、野菜、果樹、花き等多種多様な作物を生産している。高齢化に伴い農業の後継者が不足している。群馬県の他の地域と比べて多種多様な作物を栽培できる点は強みである一方、担い手の確保・育成が課題となっている。

## 2. 送り側地域の概要

(神奈川県教育委員会)

- 神奈川県の専門高校では、産業教育系の専門学科を設置し、地域を担う人材を育成している。今回は、農業の課題解決に向けて取り組んだ。神奈川県内では、新規就農を受け入れられる法人が不足している。かながわ県版デュアルシステムを用いて農業体験を進めているが、受入農家数が少なくマッチングが課題となっている。
- そこで、本取組がかながわ県版デュアルシステムの補完的プログラムとして、集中的に農業体験を行う機会の中で、健全な地域の担い手の育成につながると考え、NPO 法人未来の担い手支援機構と連携して本事業に取り組んだ。

## 3. 連携のきっかけ・目的

(未来の担い手支援機構)

- 当社と一緒に事業に取り組んでいる中之条町の地域力創造アドバイザーをしている方から、本事業を紹介され、取り組むことにした。両地域の課題に交流推進支援事業で解決につながると考えた。
- 当機構では「かながわデュアルシステム支援センター」を受託しており、神奈川県とのかかわりもあったことで、事業に参画した。当機構では全国の農業高校を支援しており、昨年度は東京都の農業高校の支援を行っていたので、取組は2年目となる。
- 学校の授業だけでは農業の現場に踏み込めていない点が課題であったため、体験ではなく本格的なものを目指した。また、インターンシップを通して就農への意欲が高まった際に、中之条町で就農を受け入れて頂ける状態にしてもらった。
- 神奈川県内の農業高校5校に声掛けを行い、吉田島高校が手を挙げていただいた。同時に開催した東京都の高校生とは事前にオンラインの交流会を行い、当日のコミュニケーションがスムーズに取れるよう工夫した。

## 4. 取組の過程・事前準備

(中之条コネクト)

- 中之条コネクトは中之条町の農家が中心となって設立された NPO 法人で、本事業においては高校生の受入や、農家と話し合いながらのプログラム造成に取り組んだ。
- 受入先の農家の選定は、将来の就農につなげる視点行なった。受入にあたって農家との調整や、熱中症対策などで農家との密な連絡を取っていたほか、安全管理体制も徹底した。
- 中之条町のことを好きになってもらいたいと考えながら、ガイダンスや休日の過ごし方などは、中之条コネクトが検討した。

## 5. 当日の様子

(中之条コネクト)

- プログラムは8月1日から8日までの7泊8日で行った。初日はガイダンス・受入農家への挨拶を行った。元農家の町長にも激励に来てもらった。
- 2日目からは実際に農家に行ってもらった。実際の農家の活動時間帯に合わせて早朝から農作業を行うスケジュールとなっているが、生徒の体調に応じて時間を短縮するなどの対応は随時行なった。4日目には町内の吾妻中央高校との交流会を行い、それぞれの学校の特色を話し合うなどした。
- 5日目・6日目は消費者にふれるための販売体験、7日目は休日の地域体験としてカヌーや、町の特産品であるバラの体験、また最終日には花火・BBQ 等も体験いただいた。最終日は関係者への挨拶を行って解散した。

- 受入側として実感した効果として、若手を受け入れることに前向きになったと感じている。農家は若手を受け入れることが少ない傾向にあるが、次世代を育成しようという意識が高まっている。高校生からは中之条にまた来たい、農業への関心が高まった、といった声をもらっているので、長期的に見て担い手の育成につながっていると考えられる。

## 6. 効果・今後の展望

(未来の担い手支援機構)

- 送り側としても高い効果を感じている。神奈川県から参加した生徒は、中之条町での就農について前向きに考えている。8月の滞在中にも大人の方々に親切にもらったことが印象に残っており、10月に中之条町で行われたイベントに高校生が参加するなど、効果が継続している。
- 単発の取組に終わらないよう、次年度の取組についても準備しているところである。

(中之条町農林課)

- 中之条町に泊まりに来ていただき、農業に取り組んでもらうことで、農業に対する理解促進をはかり、職業選択の明確化や学習意欲の向上、将来的な就農者育成の一助となることを期待している。
- 今回参加した生徒は将来的に農業に携わりたいと口にしており、その選択肢に中之条町も入っていればと考えている。

(中之条コネクト)

- 次世代の育成・受入に対する意識が高まっていることは喜ばしいことであり、いずれインターンシップをきっかけに就農する方が出てきてほしい。コーディネーターとして関わることでスムーズな受入ができたと考えている。

(神奈川県教育委員会)

- コーディネーターを介して受入側とのコミュニケーションを密に取れたことが、先生にとっても満足につながった。農業体験だけでなく、地域での暮らしを学び、移住後の暮らしのイメージが持てた点も良かった。

(未来の担い手支援機構)

- 新しいことに挑戦した価値を実感している。生徒の募集等、より多くの生徒が参加できるよう取り組んでいきたい。受入側の体制がしっかりしており、窓口となる方がいることが受入の実現につながった。今後他地域で行うとしても、受入体制は重要になる。最後に、吉田島高校の先生からコメントをいただきたい。

(神奈川県立吉田島高等学校)

- 私のクラスの生徒を受け入れていただき、感謝している。本人は中之条町で親切にいただいたことに感動し、他の地域での就農体験にも出かける予定である。
- 私はこれまでも40団体ほど、就農体験の受入先を探してきたが、地域での暮らしの体験や交流までできるところはあまりなかった。そういったところを探すのは本当に大変で、是非こうした取組を継続して頂きたい。学校で学んだことが現場でどのように活かされているかを体験したい生徒はたくさんいるので、今後も

こうした地域があれば積極的に生徒を送り出したい。

資料抜粋(神奈川県・群馬県中之条町提供)

#### 【受入側】成果・効果

##### 1 地域農家の若手受け入れ意識の向上

担い手の獲得が急務である中之条町において、恒々の農業事業体によって次世代の担い手を育成する風土を高める必要がある。そのため、高校生のような将来を担う人材の受け入れを行うことで、農業者たちの間で具体的な受け入れイメージを膨らませることにつながった。

##### 2 将来的な担い手候補の獲得

今回のインターンシップがなければ中之条を訪れることがなかった高校生が、中之条に来て、農業に取り組む、将来の選択肢の一つになった。

10月に行われた「中之条りんごまつり」にインターンシップに参加した生徒も参加するなど、交流を継続しています。



12

#### 【送り側】成果・効果

##### 1 キャリアとしての農業にふれる機会の確保

インターンシップを通して、都市農業とは異なる農業・畜産業のあり方に実際にふれることができ、将来の選択肢のひとつとして農業を考えるきっかけになりました。

##### 2 他地域の生徒や、多世代との交流

インターンシップを通して、東京都立高校から参加した生徒や、中之条高等学校の生徒との交流ができました。また、農作業や地域のイベント参加等を通して多世代の交流ができました。



期間中に開催された地域の花火大会にも招待され、地元関係者との交流が進んだ。

13

Q. 生徒たちも、農業の現場に対する関心が高いのか。

A. (吉田島高校) 生徒たちは学校で学んだことが現場でどのように活かされているか、関心を持っているが、体験できる場所がわからなかった。これまでは新・農業人フェア等に足を運んで探していた。

Q. 今回参加した生徒が、感想等を周囲の生徒に共有する機会は持てたか。

A. (吉田島高校) まだ報告の場は持っていないが、県内の農業体験については報告会を行う。その際に、県外での体験も選択肢の一つであることを、生徒本人から紹介してもらえたらと考えている。

Q. 多岐にわたる農業体験や、地域との交流の場までを用意されたが、どのように受入農家を探していったのか。受入農家を広げるコツを教えてください。

A. (中之条町コネクト) 農業者が集まってできた NPO 法人なので、農業者を集めることは当社の得意分野である。農家が集まるだけでは対応できないことについて、事務局として支援することで、日程調整等のスムーズな対応ができたと考えている。

Q. 関係者が増えていくことでコミュニケーションが難しくなるといった弊害は起こらなかったか。

A. (吉田島高校) イベントとしてコーディネートしていただいたので、企画・手配等を学校側で行う必要がなく、送り出すにあたっての手間がかからなかった。

Q. 参加者から質問をいただいている。今年度は総務省の事業を活用して取り組まれたが、今後の財源について教えてください。

A. (中之条町農林課) 中之条町では、次年度の予算は一般財源から支出することにしている。長く継続するためにも自己負担を見直ししながら検討したい。

#### 有識者による講評

早稲田大学名誉教授 宮口侗迪氏

- 交流とは、自分とは異なるタイプの人と付き合い、相互に影響しあい、成長することに価値があると考えている。そういう観点から、本事業の発足時から携わっている。
- 2組の事例はそれぞれ工夫がされたものであった。下市町の取組について。小学生が実際に林業にふれられたことは、子どもたちにとって非常に印象深いものになったのではないかと。県内の交流であったため、自分で、あるいは家族とともに再訪しやすい点で価値がある交流である。
- 中之条町の取組について。双方に NPO 法人が関わったことが、事業をスムーズに進める上で素晴らしいアイデアであった。

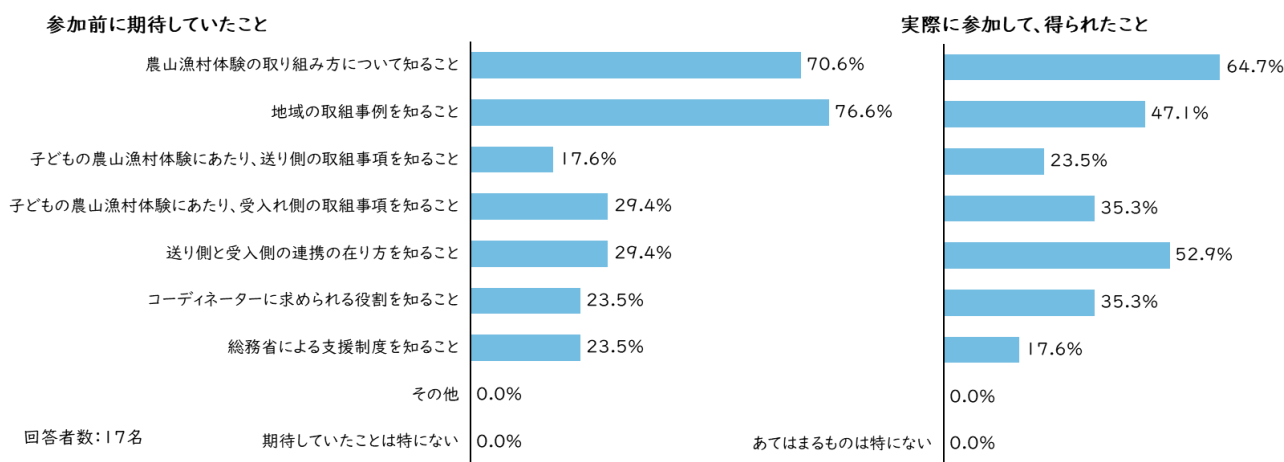
- 居住する地域・価値観が異なる子どもが訪れることで、受け入れる側にとっても成長の機会となる点が、交流の価値である。こうした事業は是非国としても進めていただきたい。
- 交流をしたくても相手が見つからない、学校と地域をどのように結び付ければよいかわからないといった課題を抱える地域のために、送り側と受入側をマッチングできる仕組みなどがあると良い。
- 今回の 2 つの交流が良い成果を上げたことは喜ばしく思っている。総務省においても、引き続き事業を進めていただきたい。

### ③ 参加者アンケートの結果

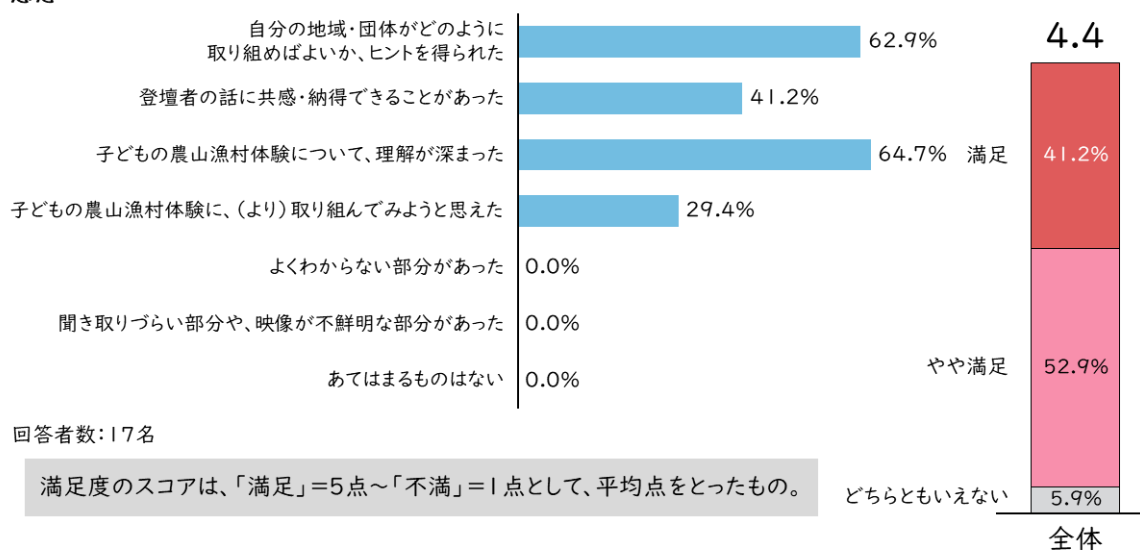
事前の期待と、事後に得られたことを比較すると、「送り側と受入側の連携のあり方を知ること」で伸びており、2 つの取組の特徴的な連携が参考になったものとみられる。

感想としては「自分の地域・団体がどのように取り組めばよいか、ヒントを得られた」「子どもの農山漁村体験について、理解が深まった」が 6 割を超えており、自由記述でも事例の内容に刺激を受けたといった内容が目立った。

図 20 報告会の参加者アンケート結果



### 感想



## 第5章 子どもの農山漁村交流プロジェクトの課題と今後の方向性

### (1) 各業務を通して明らかになった課題と解決の方向性

本事業では、計画策定 2 地域、交流推進支援事業 2 組、計 4 つの事業を行った。また、セミナーでは送り側・受入側それぞれの有識者・先進的な実践者のお話を頂いた。これらの成果をふまえ、子どもの農山漁村交流における課題と、解決の方向性を以下の通り整理した。

#### ① 送り側とのマッチングができる仕組みの構築

新たに受入を目指す地域にとって、送り側のニーズがわかりづらい（受入側は HP 等で情報発信をしているが、体験に興味のある学校の情報や、誰に聞いたら良いかなどわかりにくい）。

送り側が子どもに何を学んでほしくて交流を行うか、事前に確認する手法があれば、交流がより有意義なものになる。

<解決の方向性>

- **（全国的な支援）送り側のリスト化**・・・農山漁村体験に関心のある学校が、希望するテーマや内容等を共有できる仕組みを構築する。なお、送り側の関心は教師等の属人的な要素もあり、一度実現につながったとしても、地域として継続させていくためには、新たな課題も想定される。

#### ② 農家民宿に限らない裾野の拡大・多様な子どもの農山漁村体験のあり方を実証・展開

人口減少・高齢化によって受入体制の縮小が進む地域にとって、小規模化・分散化などは必須。また、送り側のニーズに応じて社会教育等も含めた多様なあり方が考えられる。

<解決の方向性>

- **（個別地域の支援）受入品質の向上**・・・コース別の教育旅行に対応するには、受入の品質を全国レベルで一定に高める必要がある。また、こうした高付加価値化の取組は、宿泊単価の引き上げにもつながる。
- **（個別地域の支援）Web サイトによる情報発信の強化**・・・収益性の観点から旅行会社が取り組みにくい中小規模の団体については、Web サイトによる主催者との直接連絡なども販路になりうる。また、クチコミ効果や、多様なニーズに対応しうる利用者目線での具体的な情報の提供を目指して、体験者の声を掲載するなどの施策が考えられる。
- **（広域の支援）宿泊施設と体験提供事業者のマッチングを支援**・・・教育旅行は平日の団体需要を確保できる点で、宿泊事業者にとってもメリットになる。また、農家民宿の受入が体力的に難しい場合、日帰り体験や共同調理の部分を実施することも考えられる。これらのマッチングを広域で支援し、事業者間の連携をコーディネートすることで、これまで受入が難しかった地域や学校規模も対応できる可能性がある。

#### ③ 連携省庁の支援施策を活用した、中長期的な地域の支援

総務省の支援施策を活用した次のステップとして、連携省庁の支援施策を活用しながら、自走化を目指していくことが考えられる。なお、支援の対象は、子どもの農山漁村交流に限らず、波及する分野全体をとらえて支援することが望ましい。

<解決の方向性>

- **（個別地域の支援）**支援にあたっては、地域の課題や本事業に取り組む目的を再確認した上で、今回得られ

たノウハウを何に活かしていきたいか確認する。

(参考)

交流推進支援事業を実施した下市町では、大学との連携深化や他地域の子どもの受入、中之条町では就農を希望する大人等を対象にしたインターンシッププログラムの提供など、子どもの農山漁村交流にとどまらない構想をもっている。これらの取組を実現させていく主体は、子どもの農山漁村交流のコーディネート組織が引き続き担っていくことが予想されるため、子どもの農山漁村交流が他の事業に波及していくことを想定した中長期での支援が求められる。

## (2) 連携省庁ヒアリングの結果

子どもの農山漁村交流プロジェクトには、主管となる内閣官房・内閣府や、本事業を実施する総務省のほかに、文部科学省、農林水産省、環境省も関わっている(図 21)。連携省庁における子どもの農山漁村交流の取組を整理するとともに、連携にあたっての課題を確認するため、連携省庁に対してヒアリングを行った(表 14)。

図 21 子どもの農山漁村交流プロジェクトにおける各省庁の施策\*



\* 出典:内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局作成資料(令和5年11月時点の内容)

表 14 連携省庁ヒアリングの結果概要

|                  | 文部科学省                                                   | 内閣官房                                                         | 農林水産省                                                   | 環境省                                            |
|------------------|---------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| 実施日              | 2023 年 9 月 4 日                                          | 2023 年 9 月 4 日                                               | 2023 年 11 月 16 日                                        | 2023 年 11 月 16 日                               |
| 関連施策             | 学校等における宿泊体験活動に対する支援                                     | 関係省庁連絡会議<br>長期の体験に対する支援                                      | 農泊推進事業                                                  | 自然体験プログラムの開発・実施支援                              |
| 農山漁村交流の位置づけ      | 体験活動に割り当てる時間数は学習指導要領で定められておらず、多忙な学校現場で力を入れることは難しい。      | デジタル田園都市国家構想で関係人口施策に位置付けられており、関係省庁連絡会議を行っている。                | 農林漁業に関心を持ってもらう機会としては有意義。農泊のターゲット層の一つに、教育旅行等の学校団体が挙げられる。 | 国立公園の利用の一つに教育目的も挙げられる。                         |
| 現状・課題            | 文部科学省から学校に何かを強制することはできない。                               | 長期の宿泊体験に対する支援は、文部科学省で支援できない取組を支援するものだが、活用が難しい                | 農業者に余裕がなく、副業や生きがいで体験の受入に農業者自身が取り組むのは難しい。                | 各国立公園で、地元の学校と連携した教育活動等を行っている。都市部からの受入にはこだわらない。 |
| 農山漁村交流に求めること・可能性 | 研究授業や校長会などを通して、優良事例を横展開するのが有効では。社会教育活動で取り組むと、制約が少ないのでは。 | 2019 年度に制作した教職員向けの手引きを、コロナ後を見据えて改訂したい。子どもの農山漁村交流の明確な定義が必要では。 | 農山漁村地域に関心の高い親子を対象に高付加価値な体験を提供する仕組みがあれば、来訪者・受入側ともに有意義では。 | 現場レベルで子どもの農山漁村交流について知ってもらうことがまず必要ではないか。        |

ヒアリング結果から言えることは、以下の通り。

- 農山漁村体験の意義は理解しており、各分野の普及啓発や将来の担い手育成にも有効な取組である。
- しかし、送り側・受入側それぞれの現場において、「本業」（学校ならば授業、農家ならば農業生産など）で忙しく、それ以外の取組を行うのは負担が大きい。
- 連携省庁の動向について共有するとともに、子どもの農山漁村体験に関する優良事例を分野横断で共有できる場があると良い。まずは現場レベルで実践することが重要ではないか。
- 社会教育や個人旅行に近い形態など、従来の学年やクラス単位で行動する教育旅行の枠にとらわれない様々な取組を支援していくことで、裾野を広げられる可能性がある。

### (3) 課題解決の方向性

本事業の成果及び連携省庁のヒアリング結果をふまえた課題解決の方向性を、以下の通り整理した。

#### 1. 本業で忙しい方の負担を軽減する仕組み

- 1-1. 特にモチベーションの高い方からモデルとなる取組を行い、横展開していく
- 1-2. 送り側・受入側それぞれコーディネーターが支援するなど、第三者や専門の事業者が関与する仕組み

#### 2. それぞれで取り組んでいる教育事業との接続

- 2-1. 近隣の子ども向けの教育プログラムや、日帰りの教育プログラムの価値を再確認する。

また、これらのプログラムを複数日程に伸ばしたり、日帰りの受入実績をもとに新たに宿泊の受入に取り組む地域を支援する。

- 2-2. これまで宿泊なしで体験を受け入れていた地域・事業者にとっては、宿泊施設との連携が必要。
- 2-3. 宿泊施設と体験提供事業者等をつなぐコーディネーターの役割が、送り側にとっても必要。

#### 3. 送り側と受入側のマッチング

- 3-1. 受入側においては、教育委員会と連携することで公共性が担保され、送り側の安心につながる。
- 3-2. 交流を希望する送り側からの情報発信や、受入地域への提案を促進する仕組みを作る

#### 4. 他の地域活性化施策への広がり

- 4-1. 体験・交流を入口として、他の取組に広げていく地域の支援に力を入れる。

例) 子どもの受入ノウハウを、大人やインバウンド等に活用する

送り側・受入側地域の連携をきっかけに、物産や防災等の分野で連携する

⇒ 取組を広げていくにあたり、新しい挑戦に人的・金銭的リソースを割くためには、体験・交流の運営の効率化が必要。そのためにも、コーディネーターとの連携や、収益確保に取り組むことが望ましい。

- 4-2. 子どもの農山漁村交流に取り組む地域の支援にあたる、地域が取り組みたいこと・目指すことを再確認し、連携省庁の施策を含めて幅広い視点で解決策を提示できる、伴走支援体制が求められる。